関東学院
学院史資料室ニューズ・レター

No.20
2017.3

キリスト教教育の礎となる共同生活
「学寮」特集

目次

はじめに …… 2
タイ・ティワタ村の子ども寮支援活動について …… 3
キリスト教と寮生活 …… 5
友達・先生・そして神様と一緒に過ごすお泊り会 …… 7
「主にあって共に生活する喜び」 …… 8
みどりの学校 …… 9
64年目を迎える自然学校の取り組み …… 10
関東学院中学校高等学校「修養会」 …… 11
夏季合同合宿に参加して …… 12
元関東学院女子短期大学の「リトリート」について …… 13
関東学院の学寮と変遷（1900-2000年） …… 14
かんらん寮とその記録 …… 18
関東学院大学「YMCA寮」 …… 19
関東学院女子短期大学学寮・ルツ寮 …… 23
関東学院大学「青雲寮」 …… 26
学院史資料展2016「建学の精神と校訓『人になれ　奉仕せよ』の教育」… 32
編集後記 …… 39
関東学院三崎寄宿舎 …… 40

名　　称：中桐荘
所 在 地：鎌倉市御成町15-22
敷地面積：1, 150㎡
建　　屋：住宅3棟の中の1棟が中桐寮

名　　称：軽井沢山荘
所 在 地：軽井沢町大字発地字大原
敷地面積：6, 675㎡
建　　屋：山荘3棟、住宅1棟、
浴室や渡り廊下

名　　称：葉山学寮
所 在 地：三浦郡葉山町堀内
敷地面積：約5, 804㎡
建　　屋：本館、教室棟2棟、住宅2棟

はじめに

関東学院　学院長　小　河　　陽

『関東学院学院史資料室ニューズ・レター』第20号は「キリスト教教育の礎となる共同の生活」を特集テーマに、「学寮」についての種々の思い出を語っていただくことにいたしました。そして、寝食を共にする共同生活という意味で、寮生活ほど長期にわたるのではないけれど、類似する合宿やリトリートの体験も掲載されています。

現代の教育一般は、高度な科学技術の発達した複雑な現代社会の中で「責任を担う市民」として生きていく人材の養成が自ずと要求する人間形成を目指します。キリスト教に基づく教育を目標に掲げる関東学院の教育においては、その完成形を、つまり「完全なる」人間の形成を目指すと言えます。校訓が「奉仕せよ」の前に「人になれ」を説く理由を、マタイ福音書5章48節「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」に照らして、そのように理解することができます。

古代ギリシア人がすでに、教育とは人間形成に他ならないと考えていました。「教育・文化・教養」を意味する古代ギリシア語「パイデイア」はごく単純素朴に子供を養い育てることを原義としており、それゆえ教師は「パイダゴーゴス」、つまり子供を導く者と呼ばれたのです。それが成人の教育を、さらにはその結果をも含むまでに意味の拡大を見ました。

子供を成人へと育て上げることが教育に他ならないなら、教育の営みに「寝食を共にすること」や鞭を使うような、現代では暴力的と非難が起こる「しつけ」が含まれることは自然な成り行きです。そのような古代ギリシアの有名な学校の一つに、修辞学を修得するための「イソクラテスの学校」がありました。

この学校にはギリシア各地から生徒が集まり、先生と一緒に寮生活を送りながら、まるで父子・兄弟のような関係の中で学びましたから、卒業時には、先生たちや仲間たちと別れ難くて、卒業したくない、故郷に帰りたくないと泣いたり、駄々をこねたりする生徒さえ出た、と言われるほどの連帯意識が生まれていたそうです。欧米で「ボーディング・スクール」と呼ばれる学校の歴史は比較的浅いのですが、その理念的原型はおそらく此処にあり、知育のみならず体育と徳育も含んだ人間全体の育成という教育の理念は共同生活を通して初めて可能という思想に基づくのでしょう。

キリスト教の伝統においては、寄宿制の学校は修道院制度から大きな影響を受けているようです。私は1970年代の始めに、フランスのストラスブールにあったプロテスタント神学部の寮で2年間を過ごした経験があります。これは聖トマス教会に隣接する建物で、「プロテスタントのセミナリー」と呼ばれ、大量の蔵書も備えて、かつては神学演習なども行われていたようですが、私が滞在した頃には、食堂を持つ純粋な神学生寮となっていました。

20世紀の偉人の一人に数えられるアルバート・シュバイツァーが舎監をしていたこともあった寮で、その部屋は彼愛用の机や椅子と共に1寮生に割り当てられていました。言い伝えで、彼はこの部屋でかの有名な『イエス伝研究史』を執筆し、多量のイエス伝を系統立てて分類するのに、読み終わっては順に四方に投出して、幾つかの本の山を築いていったものだから、掃除担当の小母さんが困惑した、と言うような話を聞かされました。半世紀以上も以前のエピソードでしたが、友人が居住していたその部屋で、椅子に座って机に向っていると、当時の情景が眼前に浮かび上がるようで、教場で本から学ぶことでは伝わらない無言の教えを受けたような気分に浸ったものでした。

寮生活という生活空間と時間を共にするからこそ、教室で行われるゼミの時間内には解決できなかった問題を、延々と寮の部屋で続けることができたというのも、楽しい思い出となりました。しかし、それだけではなくて、寝起きを共にする神学生仲間たちと毎日昼夜の二度食堂で顔を合わせ、食事中また食後の談笑の中で自分にはありそうもない様々な生活体験を聞かれる機会を持てたことも自分の生き方や人生設計を思案するのに大きく影響したことでした。

文字が介在した学習とは違った性格の、しかし教育として同様に大切なものが、共同生活を送る中で得られた諸々の体験が、本特集テーマで掲載された記事を通して伝わってくることを期待します。

移設が完了したオープンチャーチ（金沢八景キャンパス）

タイ・ティワタ村の子ども寮支援活動について

関東学院六浦小学校　元校長　**島　田　正　敏**

タイの古都チェンマイから南西に300キロ。車で約6時間走った山岳地帯に少数民族のカレン族が住むチパレ地方があります。約40の集落が点在し、カレン語を話す人々が高床式住居で暮らしています。学校は中心部のティワタ村にしかありません。学校まで歩くと、近い子で4時間、遠い子は2日かかります。そのため多くの子ども達が学校に通えませんでした。1992年、カレンバプテスト連盟の牧師であるダウ先生が、ティワタ村に寮を建てました。寮費は一ヶ月100バーツ（約300円）です。28名の子供たちがいましたが、寮費を払えない親が多くて運営できない状況になりました。

1994年、チェンマイ在住の日本バプテスト同盟宣教師の大里英二先生（元関東学院六浦中高教諭）から連絡があり、私たちは現地を訪問しました。寮は一棟だけでした。屋根は、木の葉を集めて竹で刺したものを乗せ、床は竹を敷き詰めただけでした。部屋の真ん中を竹で区切り、男の子と女の子が生活していました。寮には電気がなく、車のバッテリーに蛍光灯をつないで、その下で勉強をしていました。

冬は零度近くになるのですが、子供たちに冬の衣服はなく、夏服のまま生活していました。夜になると気温が下がり始めますが、子供たちは毛布がないので、体を重ね合わせて寝ていました。食事は、辛いスープにご飯だけです。スープの具は、子供たちが育てた野菜でした。しかし野菜がないときは、みんなで山の中へ行き、食べられる野草を取ってきて具にしていました。バナナの木の芯の部分も貴重な食料品です。子どもたちは、小学校や中学校を卒業するとみんな村に帰って農業をしていました。高校に進学する生徒は一人もいませんでした。

2009年に学院創立125周年記念事業として生徒8名を日本に招待しました。生徒たちは日本の現状を見て驚いていました。帰国後には、来日した全員が大学や専門学校、神学校に進学しました。彼らは、奨学金を受給したり、アルバイトをしたりして経済的には苦しい学生生活を送りました。しかし現在は、教員、看護師、エンジニア、宣教師、日本語通訳として活躍しています。彼らの活躍を身近で見ている寮の後輩たちの学習意欲は、非常に高くなりました。今は寮の食堂で、薄暗い中で勉強している子供たちの姿を毎日見ることができます。子どもたちは、勉強することで新しい未来が開けることを知りました。

六浦小学校の主な支援活動を紹介します。

【1994年】

冬着を送りました。竹で作った女子寮を寄贈。支援活動を開始しました。

この年から教員が毎年現地に行き、毛布、古着、医薬品、食料、献金などを届け始めました。

初めての寮生（1994年）

【2003年】

本校からの献金で女子寮が完成し「第1回タイ訪問団」として3人の児童と保護者がティワタ村に行きました。

献金で建てた女子寮（2003年）

【2005年】

本校礼拝堂とチェンマイのバプテスト連盟会議室を繋ぎ、同時生中継でクリスマス会を行いました。寮の子供たち十数名がティワタ村から来てくれました。またチェンマイにある「愛の家」（エイズの子供たちの収容施設）の子供たちも来てくれました。「きよしこの夜」の1節をタイの子供たちが日本語で歌い、2節を本校の児童たちがタイ語で歌い、3節はそれぞれの母国語で歌いました。

【2006 年】

「関東学院サービスラーニングセンター」を寄贈しました。

関東学院サービスラーニングセンター（2006年）

※「外務省国際協力局長賞」受賞（2007年）

※この活動を記録したビデオは、外務省主催「第３回開発教育／国際理解教育コンクール」に入選しました。また子ども寮の食事風景の写真（※）は、第４回コンクールで「国際協力局長賞」を受賞、第５回コンクールでは「学校賞」を受賞しました。

【2009 年】

創立 125 周年記念として寮に車を寄贈しました。また創立記念式典に寮の生徒８名、ダウ牧師、ソムサック寮長、通訳のオップさんを招待しました。

タイの人たちと三浦海岸へ遠足（2009年）

生徒たちは、ホームステイをしたり、海に遠足に行ったりして交流を深めました。

車をプレゼント（2009年）

【2016 年】

「第 15 回タイ訪問団」がティワタ村を訪問しました。児童３名と保護者、卒業生３名、教員４名、学院職員１名が参加しました。過去最年少の大石 雫（１年）さんは、交流会で「おどるポンポコリン」を元気に踊りました。

交流会の隠し芸（2016年）

この寮は 28 人から始まりましたが、今は 138 人の子どもたちが学校に通っています。しかし、まだたくさんの子どもたちが、学校に行きたくても行けない状況です。カレン族は、独自の文字と言語を使います。子どもたちの親は、タイ語を理解できません。子ども達がタイで生活していくためには学校でタイ語を学習しなければなりません。

タイの子ども寮支援活動は、このような歴史を経ながら活動を継続しています。

キリスト教と寮生活

関東学院大学　経済学部教授　**細　谷　早　里**

今からもう既に36年前になる1980年から1981年にかけて、私は交換留学生としてカリフォルニア州立大学フレズノ校の学生寮にアメリカ人のルームメイトとともに暮らすことになりました。このときの生活はその後の私の人生に大きな影響を与えることとなりました。この夏、再びこの地を訪れることとなり、自分の暮らした学生寮を訪ねてみました。36年を経た今も外観の変わらない建物を見て当時の出来事が次々とよみがえってきました。

この大学にはキャンパス内に9つの寮があり、合計約1,100人の学生が寮生活を送っていました。私は学部生中心の寮のひとつでGraves Hallという寮に生活していました。この寮は3階建てでEastとWestに分かれており、私の暮らすGraves 3rd Eastはたくさんのアクティビティがあるフロアでした。季節ごとに様々なイベントがあり、アメリカの学生寮生活を十分に楽しむことができました。キャンパス内の寮ではありましたが、部屋ではあまり勉強ができないので、朝ご飯を食べてから授業以外の時間は図書館、アメリカ人学生の場合はアルバイトなどで過ごし、夕食後に部屋に戻ってくるというような生活をみんなが送っていたように思います。

そんな寮生活ですが、日曜日になると様子が変わりました。多くの寮生がいつもよりおめかしをして、朝、車に分乗して出かけていくのです。みんながそれぞれ教会の礼拝に出かけているということはほどなくわかりました。日本人はキリスト教の礼拝には関心がないだろうと思ったのでしょう。だれも私に声をかけてくれる人はなく、またバスの本数も極端に減る週末はどこにも出かけられず何ともさびしいものでした。そんなとき大学のInternational Student Centerが留学生のためにホストファミリーを紹介してくれるということを聞き、週末だけでも一緒に過ごすことができたらと思って応募しました。すぐに日本人の女子学生を受け入れたいという家族が見つかりました。私と同じ年齢の学生のお嬢さんがいらっしゃるBabcockさんという家庭でした。それから、週末のたびごとに寮まで迎えに来てくれ、日曜日には大変熱心なクリスチャンである彼らとともに教会に行くというのが日課となりました。お母さん、お父さんとお嬢さんは教会の聖歌隊で歌っており、歌が好きな私もすぐに加えてもらうことになりました。こうして水曜日の練習日、そして週末は彼らとともに行動することになったのです。教会へ通うことが私の生活の一部となりました。

アメリカでのこの生活が契機となって私のその後の

歩みが変わったと思われることがいくつかあります。まず、初めて親元から離れた生活をして、それまで親に反発することが多かった自分がいかに両親に守られてきたかということを知ることができたこと。アメリカ人の寮生とともに暮らして、若い彼らも教会に通うことを生活の一部にしていると知ることができたこと。熱心なクリスチャンであるホストファミリーと出会い、キリスト教と家族について考えるようになり、そして信仰に導かれたこと。留学中インドシナ難民のラオス人モン族の人たちと出会い、異文化についてより深く考えるようになったこと。それまでに感じたことがなかった勉強の面白さを知り、大学院に進もうと決心したことなどです。

当時はインターネットもない時代で、国際電話も5分で数千円という時代でした。連絡は手紙のみで、あまり筆まめではない私はかなり両親に心配をかけました。アメリカ人学生はかなり自立しており、自分の学費を稼ぐためにアルバイトに精を出したり、生活を楽しんだりする一方でよく勉強もしていました。彼らは人の生活に干渉をすることもまったくなく、私には何でもやりたいことをする自由がありました。あこがれの地カリフォルニアでのせっかくの留学生活ですから、できるだけ多くのことにチャレンジしたいと思いました。そのような中で、しだいに私は自分を守りつつ生活していくには何を規範にしたらいいのかと不安を感じるようになりました。そんなときに私は聖書と出会い、この言葉に従って生きていけばきっと大丈夫だという確信を得ることになったのです。日本語の書物が簡単に手に入らず、友人からもらった日本語の聖書をむさぼるように読んだのを覚えています。

また、多文化社会であるアメリカで当時急激に増加したインドシナ難民の人たちと出会ったことは現在の研究テーマである異文化間教育に進むきっかけとなりました。学生寮のGraves Hallでは日系三世の学生が2人いるのみで私だけが外国人でした。アメリカ人の寮生たちは最後まで、外国人である私を理解するのが難しかったと言っていました。週末に私に声をかけ辛かったのもそれが理由かもしれません。彼らにとっても私の存在は異文化体験だったことは間違いないでしょう。

36年前のあの経験は1年でありながらも多くのことが凝縮された1年でした。当時お世話をしてくださったBabcock familyのお父さんお母さんも今では80歳を超え、私も当時の彼らの年齢をとうに過ぎています。私の両親、アメリカの両親とあの1年間がいかに私の人生を方向付けたのか語り合うこともあります。社会に出る前の一時期をこのように過ごすことができたことは私にとって本当に幸せなことだったと思います。

現在のカリフォルニア州立大学フレズノ校（2016年8月24日撮影）

友達・先生・そして神様と一緒に過ごすお泊り会

関東学院六浦こども園　教諭　藤　肥　礼　子

「お泊り会」は関東学院幼稚園時代から40年以上続いている年長組恒例の行事です。かつては園舎や野島の研修センターに宿泊していました。銭湯体験・食事作り・キャンプファイヤー・花火・魚を捕まえる為の仕掛け・ホールに布団を並べて全員で寝た事・夜の様子を見る為にクラスで飼っているカブトムシを研修センターまで連れて行った事・子ども達と考えながら進めた面白い企画で宇宙人や忍者！？が登場した事もありました。

その年その年心に残る沢山の楽しい思い出はそれぞれに違いますが、毎年感じるのはお泊り会後の子ども達が「一回り逞しく見える」「大きくなったね」と言う事です。

6年前から「上郷森の家」に宿泊し、散策や自然観察をメインにプールや火の間での夜の集い等、充実した時間を過ごしています。一昨年の6月、夜の散策で森の木々に光る「蛍」の姿を見て、子ども達と共に感激の歓声を上げた事は忘れられない思い出の一つです。

毎年恒例の大きな行事なので年長組になるとお泊り会を意識し不安を見せる子どもや心配して保育者に相談する保護者もいます。その気持ちを受け止めながらお泊り会が近付くと不安が楽しみに変わる為の投げかけや提供をしていきます。徐々に「行きたい！」「面白そう！」「先生や友達が一緒だから大丈夫！」と思える子が増えていくのですが、当日まで「楽しみと不安」の気持ちで葛藤したまま「お泊り会」を迎える子どももいます。

日頃はしっかりとしているMもその一人でした。感受性の豊かなMは「友達と寝る約束したけど大丈夫かな。やっぱり行くのやめようかな～」「先生、困ったら助けてくれる？」と心が揺れており、当然その様子にお母様も心配しながら励ましていました。

お泊り当日、出発を見送る母の姿に涙ぐんでいたMですが、森遊びやプールを意気揚々と楽しめました。夜になり子ども達と散策に出かけた時、雲の間から見えた月が美しくほっこりした気持ちで眺めていると「良かった！月が見えた！ママと『離れているけれど一緒の月を見ようね』って約束したんだ！」とMがしみじみ友達に話していたのです。月を見た時、Mは優しく励ましてくれる母親を傍に感じていたのだろうと思います。心細い気持ちを乗り越えようとするMの気持ちとMを想うお母様の気持ち、そして親子の結びつきを感じて私は胸が熱くなりました。その夜Mは友達と一緒に寄添って就寝。朝目覚めると「とまれちゃったー」と少し自信が持てた愛らしい笑顔を見せてくれました。

年長の殆ど全員が経験するたった一泊のお泊まり会ですが、一人一人に「育ち」のエピソードがあります。家族と離れ「友達と一緒の楽しさや心強さ」を感じながら過ごす経験が子ども達の精神的な成長に繋がる「お泊り会」の凄さを改めて感じます。

お泊り会が始まる時、また朝夕拝や就寝時に子ども達は「いつも一緒にいて守って下さい」と祈ります。子ども達は神様にお話しする事（祈り）で無意識の内に心が支えられている様に思えます。そしてその祈り通り神様は子ども達の心身を守り、傍で励まし、成長の一歩と導いて下さっていると毎年痛感する「お泊り会」です。

「主にあって共に生活する喜び」

関東学院のびのびのば園　園長　井　上　恵　子

のびのびのば園は、幼保連携型認定こども園となり、5年目の歩みを続けています。35年余、キリスト教保育を野庭幼稚園に於いて担ってきた歴史を思うと、こども園となった今のこの時、クリスチャンの諸先輩方がキリスト教保育が継承されるように祈り、キリストの愛に学び、こどもの育ちを守り導いてきた日々の健闘が目に浮かびます。

こども園となって長時間保育を受けるこども達が全体の半分以上を占めています。長時間でなくても、延長保育を利用したり、こども園での滞在時間は年々長くなっているのが実情です。乳児は午睡や食事を中心として時間が動きます。園で過ごす時間が長く、生活のほとんどを園で過ごすこども達が多いです。

また幼児クラスでは一日の生活が活発になり、自由な発想の中で、想像力が育まれ、無から有の固有の可能性が芽生える場所となっています。

毎月覚える聖句や讃美歌、聖書のお話しを通してこども達は自然に神さまの存在を認め、心を向けるようになり、生活を共にすることで、一人ひとりが特別で大切な存在であることを当たり前のこととして、無意識に学んでいきます。

こども園はまさにこどもが生活を共にして育つ楽しい場所と言えるでしょう。のびのびのば園のすべてのこども達が主にあって豊かな祝福を受けることを願っています。

また、保護者にも日常的に園の雰囲気に触れて頂けるようにわかば会での活動やバイブルクラスへのお誘い、お誕生会や座談会参加などを通して、「共に生活する場」としての理解が深まるようにしています。

年長クラスは夏にお泊り会があり、それぞれの成長が促される時となります。どこにあっても「主が共にいてくださる」という聖書の約束に立ち、こども達の居場所として安心して過ごすことができる生活の場であることを日々の保育を通して伝えています。

写真は月に一度のお誕生会の一場面です。この日は乳児クラスから年長クラスまでが一堂に集まり、先生やお誕生月の保護者の方々と共に楽しい時を持ちます。

お誕生日のこども達には先生から手作りのカードが届けられ、保護者有志のコーラスでは、楽しい歌やダンスがプレゼントされます。

生活の場として、こども園はたくさんの人たちによって支えられ見守られています。地域の教会とも協力してこども達へのみ言葉の種まきも行っていきたいと思います。

園児も保護者も先生も愛に溢れた楽しい誕生会！

みどりの学校

関東学院小学校　校長　岡　崎　一　実

1958年パンフレット

関東学院小学校の宿泊行事は「みどりの学校」と名づけられており、現在は１学期中に学年ごとに２泊３日（1、2年生は１泊）の日程で実施しています。清里清泉寮（6年生）、軽井沢恵みシャレー（5年生）、伊豆天城山荘（4年生）と自然環境に恵まれたキリスト教関係の施設を利用しているほか、低学年も西湖（3年）、丹沢（2年）、上郷（1年）と、行き先はここ５年ほど固定しています。

しおりの最初のページにはテーマ聖句「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす。」（口語訳詩編 19:1）が掲げられ、めあてとして「新しい視点で生活や友だち、自然、そして神さまのことを考える」ということばが記されています。家や学校を離れ、すこし距離を置いたところから広い視点でつながりや関係を考える機会としてほしい、という願いがこめられています。

現地では登山やハイキング、キャンプファイヤーなど定番プログラムのほか、マスのつかみ取りや繭玉の工作など、宿泊地の条件を生かしたプログラムを組んでいます。2016年度の５年生は、NHKの大河ドラマ「真田丸」にちなんで軽井沢から上田まで足をのばし、上田城跡を見学しました。

はがきを持って行きお世話になっている人にあてて手紙を書く、というのも恒例のプログラムです。反対に、おうちの方に事前にわが子あての手紙を内緒で書いていただき、それを宿で子どもたちに渡して読んでもらう、というサプライズ企画をした学年もありました。

「みどりの学校」はふつうは「自然教室」と呼ばれる行事ですが、関東学院小学校ではほかの多くの活動と同様、創立当時の教職員の熱い願いをこめた独自のネーミングがされています。1952年の開校の年にすでに学校で日帰りキャンプというかたちの「緑の学校」が実施されており、1958年には5、6年生が軽井沢に宿泊したという記録が残っています。

（写真：上から6年清里、3年西湖、5年軽井沢・上田、1958年軽井沢）

64年目を迎える自然学校の取り組み

関東学院六浦小学校　教諭　梅　田　祥　司

関東学院六浦小学校で自然学校が始まったのは、1952年（昭和27年）です。創立からわずか4年目の年で、当時の3年生と4年生が冠峰楼（箱根）に出かけました。

その後、1954年（昭和29年）には、6年生が清里の清泉寮に自然学校に出かけました。この6年生の清泉寮だけは、今も伝統的に6年生の自然学校の宿泊場所として継続しており、全ての卒業生が6年生になると清泉寮に自然学校に出かけることになっています。今現在、自然学校の宿泊先は以下の通りです。1･2年生「YMCA東山荘」（御殿場）。3年生「天城山荘」（伊豆）。4年生「恵みシャレー」（軽井沢）。5年生「ラボランドくろひめ」（黒姫）。6年生「清泉寮」（山梨）。1・2年生は1泊2日。3･4年生は2泊3日。5･6年生は3泊4日です。毎年、9月に行われています。

自然学校において宿泊を体験すると、子供たちは劇的に変わります。1年生は初めての宿泊行事で、互いに支えあい励ましあうことを学びます。2年生は1年生の先輩として、奉仕することを学びます。3年生では、初めてのクラス替えの後、2泊の生活体験を通して友達の良さを学びます。4年生では、2000mを超える山の登山にチャレンジし自然の厳しさと雄大さを学びます。5年生では、最後のクラス替えの後、クラス全員が一つのキャビンで生活し、団体行動と仲間の大切さを学びます。そして、6年生では伝統のある清泉寮で神様の恵みを十二分に感じ往復15kmもの道を歩いて飯盛山の登山をします。特にこの清泉寮での自然学校では、森の中にあるレノックス野外礼拝堂で礼拝をおこなったり、ポール・ラッシュの信仰に触れたり、その生き方を自分の生き方と照らし合わしたりして、信仰的にも生活面でも子供たちは大きく成長します。また、子どもたちは生活を共にすることで、兄弟姉妹のようにお互いの距離を縮めていきます。

卒業生が口々に「自然学校が小学校の一番の思い出です。」と語ることからも、子供たちの心に深く残っている行事がこの「自然学校」なのではないかと思います。今後も、この伝統行事「自然学校」をさらに孫の代、その先へと続けていきたいと願っています。

▲1957年　汽車で清里へ

▲1960年　飯盛山登山

▲1970年　清里

▲2016年　6年生自然学校「清泉寮」

共に生活する喜びとキリスト教教育 関東学院中学校高等学校「修養会」

宗教主任 佐 藤 洋 晴

本校の校外学習で特にキリスト教教育と「共に生活する喜び」が強いプログラムは、中学１年、高校１年、高校３年、に行われる「修養会」です。

関東学院中学校高等学校 80 年史『この丘にたって』によると、修養会のルーツは、毎年夏に「三崎自由週間」として関東学院三崎寄宿舎で行われていた校外活動まで遡ります。この活動には、聖書を学び、礼拝が行われ、共に祈るというクリスチャンファミリーとしての日課が組まれていました。それは、自由参加で、学年に関係なく、生徒、先生の隔たりもなく、在校生、卒業生の区別もなく、先生や生徒の家族、友人が、グランドで野球や、キャンプファイヤーをして楽しく、穏やかに過ごす夏のプログラムであったようです。残念ながらその校外活動は、冷たい戦争の風のもとで、中止せざるをえなくなったそうです。

戦後の 1947 年に基督教青年会が復活すると、8 月に「夏期修養会」が行われました。中学校の YMCA でも夏休みに修養会が行われており、それらが、源になって「自然教室」という学校主導の校外活動へと発展しました。『関東学院百年史』で山本太郎氏は以下のように述べています。

「私は米国での経験に基づき、全校生徒の定期的な宿泊共同生活を通しての体験宗教活動の必要を痛感した。中略。自然教室はただ単に宗教教育のためのみならず教員生徒が寝食を共にしつつ共同生活をすることによってお互いの心の交流を計り、生徒達の抱えている問題を臆せず話しあえるような機会を作ることもその目的の一つであった。[…略…]美しい大自然の中で若き日の共同生活は教師対生徒、あるいは生徒対生徒同志のインターパーソナルな交わりを深め、その後の彼らの生活に何らかのよき思い出を残したであろうと信じている。」

1953 年に始まった自然教室は、1980 年を最後に「修養会」と名前が変わりました。人間的交流を大切な目的としつつ、キリスト教教育と共同生活訓練を目的とする方向に絞られたのです。

現在の修養会は、主題聖句と共に、中１は「選び」、高１は「いのち」、高３は「人になれ　奉仕せよ」というテーマで、それぞれ、2 泊 3 日のプログラムで実施しています。場所は中 1、高 3 は天城山荘、高 1 は西湖湖畔で、神様が創造した自然を感じられる場所で行っています。各修養会では開・閉会礼拝、朝拝、キャンドルライトサービス、が行われます。中１は、キリスト教生活の体験学習、神に選ばれた関東学院の一員としての共同生活訓練、人間的交流を特に大切にしています。高１は、実践的な人間交流のプログラムとキリスト教を土台とした NPO 団体の講師による講演を聞き、ディスカッションでテーマについて考えます。高３は、キリスト教を土台とした校訓と改めて向き合い、ディスカッションを通して関東学院を振り返りながら、卒業後の自分を見つめる機会を持っています。

これからも関東学院における修養会の歴史を振り返りつつ、より良いものにしていきたいと思います。

夏季合同合宿に参加して

関東学院六浦中高　YMCA 顧問
小田部　実生子

キリスト教の隣人愛の教えは、すべての人間に向けられた神の無償の愛を通して、その愛に価する尊い存在としての隣人（他者）に出会うことを教えています。しかし、この世界で他者と出会うとき、私たちは、一人ひとりの他者が持つ歴史的背景や文化的背景とも出会います。キリスト教の理念に支えられながら、現実に他者と出会うことの難しさと大切さを体験的に学ぶことは、とても大切な経験となります。

そこで、YMCA、聖歌隊、オルガニストギルドは、自分達の活動の根底にあるキリスト教の隣人愛について学びを深めるため、7 月 27 日（水）～30 日（土）に、広島で夏季合同合宿を行い、「平和と共生について」学びました。高校 2 年生 5 人と中学 2 年生 3 人の合計 8 人が参加しました。

前半は広島市内に滞在し、本川小学校平和資料館、広島平和記念資料館、日本キリスト教団広島流川教会、世界平和記念聖堂を訪れました。また、広島女学院中高の生徒さんたちに、平和記念公園付近の慰霊碑を案内して頂き、説明を聞きました。

参加した生徒達は、当時の状態がそのまま保存されている資料館で、原子爆弾によって何もかもが破壊しつくされ、共生など考えられないような惨状を目の当たりにし、非常に衝撃を受けていました。その中で彼らが最も驚いたことは、共生からほど遠い絶望しか見えない状況の中で、外国人の医師が、必死に医薬品を手に入れて被爆者の命を救うために尽力していたということ、被爆したカトリックの外国人宣教師が、平和のためにいろいろな国へ行って被爆体験を語る活動をしていたということです。また、亡くなった多くの韓国や朝鮮の方々は、その本名がわからないため、その数さえわからないという状況があることを知りました。生徒達からは、以下のような声があがりました。「横浜にいては決して知ることが出来ず、現地に行ったからこそ知ることが出来る大切な情報があることを知りました」、「絶望しか見えない状況でも、あきらめてはいけない。希望を信じていくことが大切だと考えさせられました」、「国家が主導して人間同士が殺し合う中でも、異国の人間の命を救うために活動した人がいたことを知って驚きました。戦争が壊したものに比べたらほんの小さな行いかもしれないが、この事実は、人間にはまだ『共生』社会を作り上げる可能性があるのだと思わせてくれました」。

平和学習を終えて、後半は広島県の中山間地域にある共生庵（地球市民塾）へ移動しました。そこでは、共生学を専門に大学で教えられたご経験のある日本キリスト教団の荒川牧師から、いくつかのワークショップを通して、共生について学ぶ機会を持ちました。ワークショプでは、他者に真正面から向き合い、自分を見つめながら、共生について考える上で何が大事なのかということを話し合いました。横浜の生活から離れて、非日常的な自然に囲まれた静けさの中で、生徒達は真剣に自分と向き合うことができ、大切なことに気づく経験が出来ました。生徒の感想には、このように書かれていました。「共生についてとても考えさせられました。一人で生きてきたのではなく、実は、自分の目には見えない所で誰かが支えていたり、協力してくれたりしたおかげで生きてこられたのだと思いました。人は数えきれないくらいの人と人とのつながりの線で結ばれているのだと気づきました。」「短い期間だったけれど、共に生きるということについて深く考えることが出来、忘れられない経験になりました。また機会があれば行ってみたいです」。

この合宿を通して、生徒達は、歴史的な出来事に対する様々な視点、つまり、自己の視点からだけでなく、他者の存在を認め、他者の視点からみることの大切さに気づかされました。また、これらの学びを通して、過去、現在、未来という視点で社会を見つめ、これからの共生社会を築いていく一人として、目の前の課題について深く考えることが出来たようです。そして、グローバルな視野を持って、他者と共に生きていくためには、“Think globally”、“Act locally” ということだけでなく、様々な人との出会い・体験から「自分が変わる・変えられる」、“Change personally” を体験することが大切であることを教えられた貴重な機会となりました。

今回お世話になった広島女学院中高の先生と生徒の皆さん、広島流川教会、世界平和記念聖堂の皆様、共生庵の荒川先生ご一家の皆様、ありがとうございました。

元関東学院女子短期大学の「リトリート」について

関東学院大学　職員　大野田　和　秀

関東学院女子短期大学のキリスト教教育の一環として、「リトリート」がありました。この「リトリート」は、「引きこもる」、「隠遁する」と言う意味で「修養会」を指します。

２年次生の全学的行事として、伊豆の天城山荘で毎年行います。学生数により各学科別に行ったり、２学科一緒に実施したりします。

２泊３日のリトリートの目的は、次の３つです。

(1) 関東学院の建学の精神であるキリスト教について学ぶ。
(2) 卒業後の人生の指針について考える。
(3) 教職員と学生、学生相互の親睦を深める。

学びの参考として毎回統一したテキストと、「主題」を定め、学生と教員の全員がそのテキストを読み、主題講演、学生発題、グループ討議などを行います。

２泊３日のプログラムは、リトリート委員会で各学科の特色を生かした内容を盛り込み、教職員が主体となって、出来上がります。テキストの選択や主題講演の講師、スケジュール内容なども学科独自に考えます。テキストは主に遠藤周作著の「沈黙」や「キリストの誕生」などを使います。毎年９月の下旬（秋学期開始前）に、大型バス数台に乗車し、現在の「室の木キャンパス正門」を出発し、天城山荘を目指します。

この２泊３日の行程を３グループ実施します。天城山荘の中庭を利用した朝拝・体操、キャンプファイヤーや、体育館でのゲーム大会、近接する「浄蓮の滝」や「いのしし村」を見学することなどのレクリエーションは、学生発題やグループ討議の緊張を和らげ、楽しめるひと時になっています。食事のスタイルは、1テーブルが10～12人で、大皿に盛り付け、取り分け方式で和やかな風景です。

英文科・家政科の1・2年次の「夏期学校」以来、短期大学の廃止に至るまでこの「リトリート」は継続され、学生にとってはキリスト教の学びとともに学生生活のよき思い出として貴重な体験になっていました。

◆ 関東学院の学寮と変遷（1900－2000年）

1900　1925　1950　1975　2000

1895 ― 1899　檀樹寮（築地・牛込）　― 1927

1899年10月、東京牛込区佐内町29番地に寄宿舎が新築され、28日その落成式が挙された。（1）

関東学院史上最初の建物「仮校舎」は学舎建設後に学寮となり、「ダンカン寮」と呼ばれた。

1920 ― 1923　1927　檀樹寮（三春台）

青山寮（庚台、坂田宅前）

1928 ― 三崎宿舎 ― 1942

1945

空襲で焼ける前まで、関東学院の正門を出てすぐの所に「ダンカン寮」という寄宿舎があった。（4）
1927年に出来た高等学部の学生寮だった。（1）

香川かつ先生とともに学生寄宿舎「青山」を設立し、学院の学生生徒の世話をされた。（4,5）

三崎宿舎（教練遊学）S15

1928年7月に、三浦郡三崎町諸磯海岸に夏期寄宿舎が建設された。
宿舎は戦争中海軍に徴用された。（1,5）

1953 ― 中桐寮

鎌倉の中桐寮は 1953 年、中桐久子氏より寄贈され、関東学院の所有となる。（1）

1954 ― 橄欖寮（かんらんりょう） ― 1973

1955 ― YMCA寮（旧寮） ― 1976

1962 ― YMCA寮（新館）

かんらん寮はバプテスト同盟婦人部の浄財を基に、1954（昭和29）年に本学基督教研究所の女子学生寮として建てられた。
神学部が設置されて以来、神学部の女子学生が入居したが、1965（昭和40）年秋に至り、女子学生が少なくなったため、大学当局の了承を経て、神学部の男子寮にその使用目的を変更した。（1,4）

YMCA寮（旧寮）は1955年に木造二階建を大学が買収し、学生寮に使用していたが、大学紛争の頃から YMCA の学生団体は自然消滅し、その結果、他の学生寮と変わりなくなった。老朽化が甚だしく1976年に大学はこれを取り壊した。（1,4）

新館は同敷地内に1962年、鉄筋コンクリート造の四階建てで完成された。（1,4）

女子学生寮

第二ルツ寮

1953 ― 女子学生寮（後のルツ寮） ― 1966

1955年1月、女子寮の名称を「ルツ寮」と改めた。
これは聖書のルツ記からとられた。（1,2）

1959 ― 第二ルツ寮 ― 1964

ルツ寮の収容人員は20名で足りなくなり、1959年に近隣の民家を借りて第二ルツ寮とした。（1,2）

1964 ― 新ルツ寮（女子寮・学生寮・ルツ寮） ― 2001

青雲寮外観

1963年に米国バプテスト婦人ミッションからの2万ドル（当時は750万円）の寄宿舎への寄付があり、1964年にハンソン山東面に新たな寮が完成した。（1,2）

ハンソン山とルツ寮

教職員用アパートを女子短大の学生寮に改造し、第2ルツ寮と命名。従来のルツ寮を第1ルツ寮と改称。（1,2）

1981 ― 第2ルツ寮 ― 2001

教職員用アパートを女子短大の学生寮に改造し、第3ルツ寮と命名。（1,2）

1981 ― 第3ルツ寮 ― 2001

1946 ― 学寮（青雲寮） ― 1952

1952（昭和27）年1月5日、火災により六浦職員寮、大学々生寮、研究室等三棟を焼失する。

青雲寮のクリスマス（食堂）

青雲寮の火災1968.5.25

青雲第二寮

1952 ― 青雲第二寮 ― 1955

1952 ― 青雲寮（南寮） ― 1968

1952 ― 青雲寮（北寮） ― 1976

母の日記念S39

1958 ― 青雲寮（中寮） ― 1968

軽井沢山荘

1962（昭和37）年、軽井沢町に6,675㎡の土地を購入し、軽井沢校地とした。
1962年から1967年にかけて山荘3棟、住宅1棟、浴室や渡り廊下等を建てた。
「軽井沢山荘」は学院各校が夏期の研修会や合宿で利用した。（1,2）

1962 ― 軽井沢山荘 ― 1974

葉山学寮

1965 ― 葉山学寮 ― 1972

葉山学寮は1965年に学院の厚生施設となった。建物の老朽と火災の場合の危険などの理由により、同寮を1977年に廃寮とし、取り壊すことを決定した。（1,2）

葉山セミナーハウス

葉山セミナーハウスは1980(昭和55)年6月に竣工した。鉄骨コンクリート地上二階、地下一階建、延床面積約3,662㎡で、その内容は大教室（約150人収容）、中教室（50人収容）、小教室3（30人収容）、研修室（私室）20室、個室18室、大研修室、食堂、浴室などである。（1）

1980 ― 2013

※（　）内は39ページの資料番号

関東学院の学寮と変遷（1900－2000 年）
－歴史に残る学寮－

関東学院のキリスト教教育において礎となった「学寮」であるが、その歴史は古く、関東学院の前身である東京中学院に遡る。現存する資料より紹介する。

なお、説明文の末尾にある（　）内の数字は 39 ページに掲載している典拠にある資料番号を示している。

◆ 檀楓寮（だんかん）（東京中学院）　1895-1899

米人宣教師アーネスト・ウィルソン・クレメント氏の属するパプテスト教会派宣教師団では、予てから、東京にミッション・スクール設立の意図を抱いていたが、いよいよ機熟して、クレメント氏はその基金募集に帰米し、明治 28 年一再び来朝するや、直ちに築地の居留地京橋区築地四十二番地に地を卜してこれを創立し、東京中学院と称した。現在横浜にある関東学院の前身である。明治 28 年 9 月 10 日のことであった。寅次郎は懇望されて院長の椅子に就き、クレメント氏は教頭となった。学校と云っても、もとよりバラック建で、西洋人の住居だった二階家を借り、階下を教室、二階を寄宿舎に充てたものであった。最初の生徒数は僅に 6 名、生徒数より先生の方が多い始末、まさに師弟膝を交えて教授すると云う風であった。　(3)

◆ 檀楓寮（だんかん）（東京学院）　1899-1927

1899 年 10 月、東京牛込区佐内町 29 番地に寄宿舎が新築され、28 日その落成式が挙された。東京学院校舎二階建の設計図。寄宿舎の設計図。明治 32 年 6 月 27 日御見積仕様書。下請金弐 1155 円也右之通りと書かれた書類が今も学院に保存されている。本館の建坪は 57 坪であった。　(1)

東京学院「檀楓寮」の寮生

◆ 檀楓寮（だんかん）（三春台）　1920-1923、1927-1945

マッチ箱に喩えられるような簡素な木造 2 階建て校舎から三春台に建つ関東学院は始まりました。普門院の上、現在小学校のあるあたりに建てられました。2 月に着工し、4 月からの授業に間に合わせるための仮校舎でした。翌 1920 年に本校舎が竣工し、生徒が移動した後、仮校舎が予定通り寄宿舎となりました。

関東大震災により、1923 年に焼失。　(1,4)

空襲で焼ける前まで、関東学院の西門を出てすぐの所に「ダンカン寮」という寄宿舎がありました。1927 年に出来た高等学部の学生寮でした。

1945 年 5 月 29 日の横浜大空襲により焼失。（1,4）

関東学院が初めて三春台に建造した「仮校舎」

◆ 青山寮（せいざん）　時期不明

友井禎（ともいこずえ）先生は香川かつ先生とともに学生寄宿舎「青山」を設立し、学院の学生生徒の世話をされた。戦災にあってから、庚台に寮を移し多くの生徒をあずかって下さった。　(5)

戦後、庚台の坂田院長宅の前に「青山寮」という寄宿舎が建てられて、三崎から来ていた数人の中学高校生が寄宿していました。　(4)

◆ 中桐寮（なかぎり）　1953-1980

1953（昭和 28）年 1 月に中桐久子氏より寄贈された。現鎌倉市役所に近い約 1,150㎡の土地で、住宅三棟が建っていた。うち一棟を寄付者のお名前を冠して中桐寮とした。

関東学院の所有となった中桐寮は、厚生施設として会合・研修等に使用されていたが、老朽化のため1980年に解体された。 (1,2)

◆ 軽井沢山荘 1962-1974

1962（昭和37）年、軽井沢町大字発地字大原1061番31（6,675平方メートル）を購入し、軽井沢校地とした。

1962年から1967年にかけて山荘3棟、住宅1棟、浴室や渡り廊下等を建てた。

「軽井沢山荘」は学院各校が夏期の研修会や合宿で利用した。 (1)

◆ 葉山学寮 1962-1974

葉山学寮は明治42、3（1909-1910）年頃、村井貞之助（煙草王、村井吉兵衛の義弟）の別荘としてアメリカ人建築家ガーディナー（立教学院の初代校長）の設計で建てられ、「嶺秋荘」と呼ばれた。この建物はヨーロッパの古典主義建築の特徴が見られ、建築学的にも明治・大正期の木造洋風建物として貴重なものであった。その後、これは変遷を終て、私立啓佑学園の所有となる。

1956（昭和31）年、同学園は本学院に吸収合併され、葉山小学校として発足した。1965（昭和40）年、葉山小学校は廃校となり、児童は六浦と三春台の両小学校に移籍され、建物は学院の厚生施設となった。1968年と1976（昭和51）年青雲寮火災後、葉山学寮は旧青雲寮自治会がいわゆる自主管理していた。大学は建物の老朽化により同寮を1977（昭和52）年に取り壊すこととし、これを実施した。 (1,2)

◆ 女子寮・学寮・ルツ寮 1953-1966、1962-2001

短大の学生寮が小規模ながら最初に開設されたのは1953（昭和28）年、家政科が六浦校地に移転した時だった。間もなくルツ寮と命名されたが、収容人員20名では足りなくなり、1959（昭和34）年近くの民家を借りて第二ルツ寮とした。

1963（昭和38）年に米国バプテスト婦人ミッションからの2万ドル（当時は720万円）の寄宿舎への寄付があり、1964（昭和39）年にハンソン山東面に新たな寮が完成した。当時は少なかったコンクリート造の女子寮はその後、女子短期大学が改組により大学として歩み始めるまで、何度も名を変え、女子学生の生活を支えてきた。

1964（昭和39）年の落成時には「女子寮」であったが、1967（昭和42）年に「学寮」と改称され、1980（昭和55）年には「ルツ寮」と名を変えた。更に、1981（昭和56）年に「第1ルツ寮」（第2ルツ寮が出来たため）となり、1995（平成7）年に「ルツ館」と改称され部室などに使われている。 (1,7)

（学院史資料室　外崎みゆき　記）

橄欖（かんらん）寮とその記録

橄欖寮はバプテスト同盟婦人部の浄財を基に、1954（昭和29）年に本学基督教研究所の女子学生寮として建てられました。

寮はハンソン山（現在の室の木校地）の手前にあり、学生による自治寮として運用されていました。

元学院長松本昌子先生は新設されたかんらん寮に基督教研究所の2年生の時に入寮しました。基督教研究所の養成コースは5年間でしたから、4年間を寮で生活しました。先生から伺った寮での生活の様子です。

戦後の貧困が続いている時代で、今の豊かな生活環境で育った学生には想像ができないかも知れませんが、狭い部屋（4.5畳くらい）に定員が2名という生活でした。室内は二段ベッドと小さな机が二つ置かれていて、移動するにもすり抜けて動く有様でした。

当時は大学に入学する女子学生が少なかったこともあり、経済学部の女子学生が2名ほど入寮していたことを覚えています。二人部屋なので同室者が居る訳ですが、寮生の中にはルームメート間で小さなトラブルがあったりして寮生活にあまり良い印象は残っておりません。

小さな寮で食堂はなかったので、食事は青雲寮でいただきました。お風呂は小さなものがあり、皆で順番に使いました。しかし、当時の燃料（たぶん石炭）は配給制で毎日入るような贅沢はできず、風呂を炊くのは週2回ぐらいです。裏門の近くにあった銭湯に行くこともありました。

神学部が設置されて以来、神学部の女子学生が入居しましたが、1956（昭和31）年秋には、女子学生が少なくなったため、大学当局の了承を経て、神学部の男子寮にその使用目的を変更しています。私が教員として大学に戻った頃には懐かしい寮は残っていましたが男子寮になっていました。

橄欖寮は入居する女子学生が減ったことから、神学部の男子学生のための寮に用途が変更されました。

橄欖寮が男子寮になってから、入寮された帆苅猛先生（当時、女子短期大学助教授）が告知板No74（1998/3/1発行）のなかで“学院の思い出「神学部時代」”という記事を執筆されています。記事の中から寮生活部分を抜粋して掲載します。

私が入学した当時（1966年）の神学部は、キリスト教の牧師、宣教者の養成ということを主要な目的としていた。私ももちろん、牧師になることを目ざして入学したのであるが、キリスト教徒ではない両親にとっては意に沿わないことであった。

新入学生はできるだけ寮に入って共同生活を経験するというのが神学部のならわしであった。私が入学した当時は、関東学院六浦小学校の北隣り（室の木キャンパスの西門を入ったあたり）に「かんらん寮」という神学部男子学生用の寮があった。

木造二階建てで、二人部屋八室に、食堂、および、簡単な台所を備えた小さな建物であった。

新入生は先輩と同室になることになっており、私は三年生の先輩と同室になった。居室は、備えつけの二段ベッドと机が二つ置かれると、あとはほとんど余分なスペースがないほど狭かった。

ベッドと机は、まず、先輩がどちらかよい方を選んで、残りが新入生に割り当てられることになっていた。私は二段ベッドの上に寝ることになった。それまでベッドで寝たことのない私は、入寮間もないころ、眠っている間に、ふとんと一緒に二段ベッドから床に落下した。心優しい先輩は、早速、私のために下のベッドを開けてくれて、それ以後、落下する心配なしにぐっすりと休むことができた。

中居先生を囲む男子寮生

当時の神学部の教授陣は、そうそうたる人たちがそろっており、図書室も充実していた。

私が三年の時（1968年）に、青雲寮で火災が起こり、それがきっかけとなって学生運動が盛んとなる。翌年二月には、他学部の学生たちによって、神学部と、それに併設されていたチャペルが封鎖され、授業が中断される。そして、その後の何度かの話し合いののちに神学部の廃部が理事会で決議されるのである。このとき私は学部の四年生であったが、学生、教員双方とも、それぞれ自分の行く末を見つめることを余儀なくされた。他学部に転入した学生もいたし、紆余曲折を経て牧師になった人たちもいるし、別の道を歩んだ友人もいる。それぞれ思いはさまざまであろう。

神学部は1973（昭和48）年3月に廃止となりました。同時に神学部の学生も1973年3月で全員が卒業したことから、大学は法人理事会の指示により、1973年3月14日付で「かんらん寮取りこわし」に関する公示を出しました。

（学院史資料室　外崎みゆき　記）

関東学院大学「YMCA寮」の思い出

戸塚教会牧師　阪井　隆

「我らが一つとならんがためなり」この言葉は、新約聖書ヨハネによる福音書17章21節にあるものです。（以下ヨハネとします）

主イエスが十字架にかかって、この世を去る前に、すなわち遣わされた天の父のみもとに帰ることを御自身は心に覚えながら、自分が去ったあと、地上に残される弟子たちにむけて語った言葉（訣別の説教ともいう）がヨハネ14：23～16：28にあります。それに続いて、＜主イエスの祈り（ヨハネ17：1～26）＞があります。冒頭の言葉は、この祈りの言葉の中にあるものです。この言葉は、＜YMCAの中心的キリスト教精神＞をあらわすものだと言われています。キリストにあって一つとなる理想を掲げた『キリスト教青年会』という組織であることは知られている通りですが、その組織の中に、大学生を中心とする人間教育と社会奉仕のYMCA活動が「学生YMCA」です。通称「学Y」と称し、公立、私立を問わず、全国の大学にその活動グループがあります。関東学院大学にも「関東学院大学・学Y」があり、全国の「学Y」と交流や活動をしていました。現在も「学Y」は活動を続けていると思います。

「YM寮」は、横須賀市追浜本町2-60にあった関東学院大学YMCA寮（通称 関東学院大学YM寮）は、その活動の拠点となっていきました。寮生たちは、日常活動を学内だけでなく、日曜日には毎週、地域の子どもたちを集めて「小羊日曜学校」（寮生13～14名が教師）を開き、近所の子どもたちを集めて、聖書を共に学び、時に遠足やハイキングなどをしていました。旧館（新館に対して旧寮の呼び方）のホール左横のガラスで囲われた2つある部屋の一つはそのための事務室兼教室でした。この旧寮1階には、洗濯場、トイレ、そして面白い事に、かつてのカウンター付きの炊事場、入り口右側に広いホールがありました。いずれにしても1階部分は居住に使っていませんでした。そしてまた、YM寮敷地内にある別棟の建物（寮生が使っていない建物、2つに区画され、その一つが寮の掃除をしていた吉田さんご家族の居住区域、もう一つは後に伝道所として使用部分）がありました。関東学院教会追浜伝道所は、教会活動はその建物を拠点にしていました。中居京（たかし）先生が主任で細川道弘先生が伝道師としての出発でした。小羊日曜学校はその伝道所の教会学校となり、学生たちの奉仕によって活動は続けられました。これは、YM活動の記録に残しておきたいことです。当然、追浜伝道所の日曜日の礼拝は、当初、YM寮生が中心でした。やがて、言うまでもなく寮生以外の近隣の方々、関東学院関係の方々も礼拝に参加するようになっていきました。そしてまもなく、キリスト教の信者になる儀式＜バプテスマ式＞を行うことがありました。そこに、教会の本来の姿を示すようになったのです。

最初のバプテスマを受けたのは、寮生であったと記憶しています。全身を水に浸す（これがバプテスト教派の特徴）ために、その場所を求めて、現在は「海の公園」になっている金沢区西柴の遠浅の海で、中居京牧師（前神学部部長で主任牧師）による司式のバプテスマ式を行いました。目が不自由であった中居先生を、私（阪井）は海水をかぶりながら先生の身体を後から支えた記憶があります。余談ですが、この追浜伝道所は紆余曲折を経て現在は、京急金沢文庫駅近くの町屋町で「聖路教会」としてキリスト教宣教を続けています。

中庭にて

YM寮の話にもどります。この寮は学生たちで管理運営をする自治寮でした。これは、関東学院の敷地内にあった「青雲寮」や女子寮（当初は短大女子と女子神学生がいた「かんらん寮」、後「短大女子寮」）と決定的に異なっていました。YM活動をしていた学生たちが要求をして、大学（学長は白山源三郎師）からの出資を受け、かつて遊興施設のキャバレー「シャングレラ」だった建物を購入してもらったことに始まったと聞いています。学生たちは、自分たち自身で「手作り」の学生寮施設に内部改装したと言うのです。電機科の学生が、館内の配線を担当し、建築科の学生が2階の各部屋の区切り壁及び天井を張り、また経済学部他の学生たちが自主運営の責任をもったと聞いていました。もちろん、学院の施設職員の方々が応援されたのでしょうが、学生たちの中には新聞配達をし、また牛乳配達をして、運営維持の資金を作ったと聞いたことがあります。追浜の町内会にも町内会員として集まりにでていました。このような経験談を語る方が少なくなっているでしょうから、何とか、記録に残し、整理をしておきたいものです。自分の記憶ですが、その名残りとしての経験に、夏休みを利用して旧寮を外部の団体に＜貸し出し＞をしていました。木造旧館2階、つまり畳の部屋を貸し出しするのです。（新

寮は旧寮の北側鉄筋4階建ては夏休み中食事なしの平常使用です。）＜貸し出し＞の管理と運営は寮生から希望をとって行っていました。利用者の食事などは食堂を利用していたのか、記憶が曖昧です。旧寮を夏休み中に外部の団体（とは言っても教会学校や町の子供会などでした）にキャンプや合宿用などに利用してもらうのです。当然のことですが、旧寮の寮生は、貸出期間中は使用ができないため、荷物を押し入れにしまって、移動することになります。居残り学生は新寮の仲間に使用を願うか、あるいは旧寮の部屋の一部を使用できる時もあったように思います。

寮委員会の責任によって毎年部屋の使用者の組み合わせが行われます。学年、学部に関係なく1年生から4年生までが組み合わされるのです。工学部（電気科・機械科・建築科）、経済学部（経済学科）、そして神学部（神学科）の学生が一緒に生活をするのですから個人のプライベートなど殆ど無いに等しい状態でした。私は2浪をした神学部の学生でしたが、その当時、男子神学生の寮がありませんでしたから、このYM寮に入寮試験を受けて入れてもらいました。選考にあたっては、履歴書と作文（今では小論文でしょう）および寮の入寮選考委員による面接があって、入寮許可を与えられるのです。例えば、作文は400字詰め原稿用紙2枚程度に「友」との題で書いた覚えがあります。与えられた部屋は、旧寮の畳H（室）4人部屋でした。一つ部屋に仕切りの無いだだっ広い畳の部屋です。いろいろの地方から出てきている数人が一緒に共同生活をするのですから、故郷の話、家族の話、また授業の話と尽きることのない共同生活でした。旧寮の部屋はA室からK室まであったと思います。二人部屋と三人部屋、時に4人の生活でしたが、狭いとは思いませんでした。北側の新寮は4階建てで、2階から上が寮生の居住部屋となっており、すべての部屋に備え付け机・常設ベットの2人部屋でした。

新寮の1階は玄関、入ってすぐ左に事務室、右に寮母さん（泉田のおばさん）、続いて来客用の部屋が3つ程ありました。時折、寮生の親たち、大学の先生方、また牧師さんの来客があったようです。玄関の正面奥には風呂があり、左側奥には食堂がありました。ここで全寮生が一日3食を賄われるのでした。何かの事情で食事時間に遅れる場合は、遠慮がちに＜取り置き＞を食堂の方に依頼をしておくのです。この食堂の場所を使って、寮生によって毎朝礼拝を行っていました。朝起きることのできない寮生のために、寮宗教委員は、各部屋を回って声かけをし、起床を促すのです。起こす役割を果たす者にも起こされる者にも厳しいことであったと思います。各部屋を回るときに、住人の生活振りを伺い知ることもあったでしょう。短い時間で旧館から新館へ、しかも2階から上のすべての部屋を回るのですから自分が起きるだけではない厳しい訓練を強いられることになるのでした。

寮マラソン大会

1964年（昭和39）年の4月、この年に東京オリンピックがあり、新幹線が走りました。そして1万円札がこの年に発行されたのを記憶しています。つまり、この年に、私は関東学院大学の学生生活を、ここYM寮を拠点にして始めたのでした。学生たちの自治による寮生活、しかもキリスト教を生活の基礎にしての共同生活をするのです。すべてのことがある意味驚きでした。大学祭へのYM学生として参加（伊勢佐木町を仮装して行進）、寮独自のマラソン大会、クリスマス会（関係の先生方や青雲寮、女子寮の方々を招いて）、そして、葉山のレーシー館、横浜YMCA真鶴キャンプ場などを会場にして夏期修養会、YMの機関誌「啓示」の発行などの記憶があります。因みに機関誌の目次は、第15号（1965年昭和40年発行）　―現代学生の生活と思想（野田文彦）、教会と学生（細川道弘）、夏期修養会を顧みて（田中敦）、大学祭を顧みて（三原惣一）、時事英語研究（上木和之）、大学キリスト者読書会（藤野継基）、キリスト者入門講座（岡野守也）、YMCA活動報告（石井秀尚）、学Yに学ぶ（三辻茂）、早朝礼拝と学内礼拝（阪井隆）、宗教について（盛山博）、学生の非学生化現象をみて（木村興造）、寮生活と私（戸来義臣）、寮生活とクラブ活動（菅原健夫）、今年の就職状況（高橋裕輔）、基督教主義大学に学びて（沼宮内信行）、寮生活と私（古山隆俊）、学問と信仰（藤野継基）、今を生かすー学Y活動において（三辻茂）、その後にYMCA役員紹介、編集後記、会員名簿　となっています。

この機関誌の目次からおおよそのYM活動、寮生活の傾向が窺えることでしょう。目次にある名前の人たちの殆どは寮生であり、現在はすでに直接お会いすることができなくなっている人もあることを想う時、YM寮の記録、また学Y活動の記録を整理しておきたいとの想いが強くなります。

寮費は旧寮の2倍が新寮の寮費であった。当然、食費は同じであった。この寮費の納入は学院会計課へ直接持参していた。それは、多分他の寮の人たちもそうであったと思うのですが。自分のところにある数少ない資料を用いて寮生活の生活の一端を書き、思い出を楽しむ機会を与えられたこと心から感謝します。

私のYMCA寮生活

昭和43年経済学部卒　宮坂　忠靖

関東学院大学　YMCA會館　門柱から玄関を見る

YMCA寮（旧寮）中庭より写す

YMCA寮（新館　1962年1月竣工）

YMCA寮クリスマス1964年12月

私は一年の時、新寮の201号室で、経済三年、熊本出身の盛山先輩と同室になりました。寮では、先輩の事を部屋長と呼び、後輩の事を部屋っ子と呼びます。先輩は、車のプラモデルを作るのが好きでいっぱい持っていました。オープンハウスの時、借りてベッドに並べました。室ごとのコンクールがあって、「高かったで賞」？という賞をもらったようです。

旧寮は、キャバレー「シヤングリア」？の女給部屋を改装したそうです。新寮が出来たばっかりの時は、旧寮生と新寮生は仲が悪かったようです。室の大きさもまちまちで、二人部屋から五～六人の部屋もあったようです。客が女給部屋に行かれないよう、わざと迷路にしてあったそうで、僕も新寮になかなか帰れなかったことが何度かありました。下がホールになっていて、バトミントンや卓球が出来ました。四祭（YM、青雲、ルツ寮）合同球技大会もありましたね。

8時から礼拝が始まるので、7時半ごろから寮の宗教委員が各部屋を起しに廻る事から、寮の一日が始まります。一年生は寮生活にも慣れた頃から、司会を受け持つ先輩が当番で話をする。8時15分から朝食、トースト二枚、ジャムとマーガリン（グリースと寮生は呼んでいた）。8時30分頃から追浜（横須賀）から六浦（横浜）校舎に向けて歩いていく約10分。土の道から横浜に入ると舗装されている。途中ババヤキ（おばあさんがやっているやきそば屋）ここは、青雲寮とYM寮のたまり場だ。角に床屋（当時この町の80%が創価学会）の所を左に曲がって、しばらくすると酒屋がありこの路地を入って行くと、くぐり戸があって青雲寮の側を通って校舎に入るのである。

夕食は、5時30分から7時の間に食べなくてはならないのです。NHK「ひょっこりひょうたん島」のテレビを見ながら食べたもんだ。どんぶりめし一杯、みそ汁はおかわりできます。寮生の苦手のおかずは、クジラの肉です。ゴムをかんでいる様だと言います。時間に間に合わない時は、食堂のおばさんに頼んでおくと、おぼんに乗せてカウンターの所に出しておいてくれます。

風呂は、月、水、金は寮の風呂に入れます。寮生がバイトで沸かしてくれます。遅い時間に入ると蛇口から出るのは水にちかい、他の曜日は天神湯に行きます。40円位だったと思います。風呂に入ると今度は、インスタントラーメンで夜食を食べながら、毎日のようにトランプのセブンブリッチをやりました。僕の部屋がたまり場です。ある日僕が、だれだれさんがまだ来（き）ないと言ったら、皆がくすくすと笑っていました。不思議そうに聞いてみたら来（き）ないと言わないの

である。来（こ）ないが正しいのである。群馬の言い方だったのです。

昼間、暇さえあれば卓球をやっていました。ぜんぜん出来なかった僕でしたが、先輩たちや同僚に教わって、勝てるまでになりました。ありがたかったです。

日曜日は、どこかの教会に行く事が義務でしたが、僕はあまり行かなかったです。寮内に追浜伝道所があって寮生が受け持って近所の子供達を集め、小羊日曜学校が開かれます。そして、横浜、横須賀、中央、野島公園、ロッククライミングの出来る鷹取山へ出かける者、洗濯する者、さまざまです。野島公園から東洋一と言われている日産自動車のテストコースが見られます。そして、ここ（日産自動車追浜工場）でバイトする学生も多かったです。夜8時30分から残業1時間で千円、当時としては良い方だったと思われます。昼食は、常勤務者から11円50銭のチケットを15円位で買います。安く食べられます。

さて、寮の月の行事と年間の行事について、二、三ふれてみます。まず、月に一度、ワークキャンプが朝6時から1時間半位寮舎のまわりの草取り等の掃除です。そして、中居先生、寮母さん（泉田まささん）時には、他の先生を囲んで会食が聞かれます。それから聖書研究会などもあったような気がします。必要に応じて、寮生大会が開かれます。これらは寮生全員の出席が義務付けられています。年内の活動は、まず、大学祭である。YMの前夜祭に「世界は一つ」と題して、民族衣装をつけて伊勢崎町を歩いた事もありました。その時僕は、スコットランド人の衣装をするので女性のスカートをはいた記憶があります。近所の人に呼びかけて見に来てもらい郷土芸能大会をやった事もありました。12月クリスマスを迎えて、一年のしめくくりです。コカコーラのビンに色づけして、照明を作ったのが印象深かったです。

僕の体験等を入れながら、寮委員会、寮の決まりを少し話してみます。僕は、二年の前期会計委員長に選ばれました。この年の新入寮生歓迎会は、おむすび二ケを持ち、京浜急行の最終使で三浦海岸駅まで行き、アサヒナ峠の頂上まで行き、朝日を拝みながら小使タイムで皆小便をするのです。そして北鎌倉駅まで歩くのである。途中、一言もしゃべってはいけないのです。先輩達が、あまり参加しなかったと批判を浴びました。二年の後期で宗教委員長を引き受けました。この時、相撲の番付ではないが、礼拝に出席したら白星、欠席したら黒星をつけようと宗教委員会で決め実行に移したら、またまた批判を浴びました。三年の前期は副寮長になりました。寮長（洗礼を受けている者に限る）、副寮長は、推薦者付で、立候補届けを出し張り紙をしたと思います。寮長、副寮長、YM委員長、YM副委員長、寮の会計委員長が入寮選考委員になるのです。

寮生は寮外でも、酒、たばこは禁止でした。コンパ等で酒を飲んで帰る時は、あらかじめ寮長宛、書面で届けておかねばならなかったのです。しかし、あくまでも門限は11時でした。

「アッ」という間の四年間も過ぎ、第二のふるさとを追い出される事になりました。この時、僕は一人でした。イニシャルM（宮坂）の入つたタイピンを後輩からもらって、今でも使わせてもらっています。

最後に、今の大学の事を少し考えてみたいと思います。今の大学は、合理主義と言おうか科学の急速の発展でややもすれば、自分の存在さえも失いつつあるのではなかろうか。四年間寮生活の出来る大学の大切さを考えても良いのではなかろうか。寮生活は、先輩をたて、先輩は後輩の面倒をみ、時にはぶつかり合い、時には同僚でもあり人間と人間の付き合い方を同じ釜の飯で過ごした日々が教えてくれるのではなかろうか。

平成11年3月8日のテレビのニュースで4人に1人だったか5人に1人だったか再就職を希望する人がいるとか、一つには人間関係がうまく行かなくて我慢出来ず、逃げ出したくなるのではなかろうか。3月9日のニュースでは、成績さえ良ければ三年間で卒業出来る制度ができるというが、ほとんどの人が、一度しか行けない大学を急いで出る必要があるのか？就職活動が年々早くなり、こればかりが先だって、人間関係がおろそかになってはいないだろうか。頭の勉強は三年間で終えても人間関係を体で覚える授業があって、四年になってからでなくては単位が取れないようにしておいて、これをとらないと卒業ができないと言うのはどうだろうか。

今一度、四年間寮生活の出来る大学を考えてもらえることを願って終わりにしたいと思います。

関東学院大学YMCA/OB会　会報　第8号
1999年5月1日発行　より転載

宮坂忠靖氏は2016年3月5日に急逝されました。

故人は生前、ラグビーの応援やクリスマスコンサートなどに足を運んで下さり、懐かしい寮生時代のイベント資料や寮費の領収書、写真、またOBの活躍が掲載されている記事などを学院史資料室にお持ち下さいました。生前のご支援に感謝し、ご冥福を心からお祈りいたします。

関東学院女子短期大学学寮

'73短大英文科卒（大学職員） 福水由美子

大学の室の木キャンパスに、E3号館と4号館に隣接して「ルツ館」と呼ばれている細長い建物があります。今から45年前、そこは、かつての関東学院女子短期大学の女子寮でした。私が入寮していた1971年4月から1973年3月当時は、「関東学院女子短期大学学寮」と呼ばれていましたが、その前後には「ルツ寮」と呼ばれていた時期もあったようです。その名前の由来は、旧約聖書ルツ記に出てくる女性ルツから取られたものと思われます。人の一生において、土台が作られる大切な18歳から20歳の時期を、私はそこで過ごしました。

入寮の日、室の木公園側にあった玄関ホールに初めて足を踏み入れた私を迎えてくれたのは、田中順子寮母さんと同室の先輩の満面の笑顔でした。家族に向けられるのとまるで同じその笑顔は、丸一日かけて北海道から出て来て見知らぬ人との新しい生活へ飛び込む不安を、私の中からすっかり消し去ってくれました。

部屋は二年生と一年生の二人部屋です。一階には4部屋とゲストルーム、寮母さんの部屋、放送室、食堂、和室、浴室があり、和室では希望者が会費を払ってお琴や華道を習うことができました。二階には19部屋と数台の洗濯機が置かれてある洗濯場、さらに洗濯物や布団を干すことのできる屋上がありました。2人部屋が計25部屋、寮母さんを入れて総勢51人の大家族です。

朝食はお祈り係の祈りで始まります。部屋番号によりテーブルが決められていて、食事係に当たると一足先に食堂に行き、食パンをトースターで焼き始め準備をします。おかずはゆで卵やサラダを寮母さんが用意してくれました。昼食と夕食は角井さんという男性をはじめとする数人の方が厨房で作ってくださり、お昼には手作り弁当がアルマイト製の弁当箱に詰められて、当時の短大の建物（場所は現在の八景キャンパスSCC館）一階の学生ホールに届けられました。アパートで自炊をする学生からは大変羨ましがられ、取りに行くときは寮生であることを誇らしく感じたものです。夕食の座席は自由で、食後はテーブルごとに食器を自分たちで洗いました。また、寮アドバイザーの短大の先生をお招きし、おしゃれをして一堂に会し、ナイフとフォークで食事を頂くという、ちょっと改まった雰囲気の夕食会が行われることもありました。クリスマスのディナーも大御馳走で、こうして食事のことだけでも思い出してみると、私たちが如何に大切にされていたかを再認識させられます。お世話になった寮母さんが30年の勤務を終えて定年を迎えられると知った1997年秋には、私たちの学年で感謝会を開きました。このことについては短大同窓誌『香葉』№27に記事を書かせて頂いています。

私たちの寮は、学生自ら寮生活を管理していて、寮長、副寮長、宗教委員などの役が置かれていました。掃除も毎日朝食後に行い、自分の部屋と共有の部分（廊下やトイレ）をきれいにしてから登校します。月に一度の大掃除には廊下にワックスがけをし、清掃業者が使うポリッシャーという機械を自分たちでかけてピカピカにしていました。

年間行事は、一年生歓迎会、June Festivalと呼ばれる寮祭、クリスマス会、新年会及び成人祝会、送別会等々実に多彩で、学校生活と共に寮の様々な行事をこなしていました。おまけに他大学からの合ハイ（合同ハイキング）の申し込みもひっきりなしです。夜になると寮の前の室の木公園で、お酒の勢いを借りた男子学生が女子寮に向かって歌を歌ったりなにやら騒いだりしていたこともありました。びっくりする私の横で、先輩が「また、バカをやってるわね」と軽くひと言。これも寮生活ならではのひとコマです。

二年生の時、私は副寮長と並行して寮祭の実行委員長の大役を仰せつかりました。寮祭は土曜日夕方から日曜日一日かけての2日間で多くの企画があり、とても充実したものでした。その期間は、普段友達が遊びに来ても入れない寮生の部屋をオープンにし、誰もが見学ができるようにしていました。日曜日は宗教主任による礼拝から始まり、模擬店や演芸会、バザー、ダンスパーティーを行いました。卒業した先輩も訪れてくださり、言わば同窓会の場にもなりました。渉外係が近隣の10件程のお店を廻り、広告を取ったプログラムには学長林淳三先生、宗教主任下田哲先生、寮母さん、寮長、青雲寮寮長、かんらん寮、YMCA寮から贈られた言葉が掲載されています。中でも神学部の学生寮だったかんらん寮からは、「寮生活において“共同体”の本質を、共同生活の本質を考える事を開始する。これは意義ある事だ。寮祭は持ち方によってそのきっかけを与えるのではないか。」との文章が寄せられています。そして私も実行委員長として、「寮祭という行事を通して寮生がいろいろなことにぶつかり考えさせられた（中略）プログラムに載せることが出来たのはその一部分であり目に触れたのは表面にすぎない。寮祭を通して生まれた目に見えない何かが私たちのこれからの人生に影響を与えるのではないか」と書かせて貰っています。その‘目に見えない何か’に含まれる、委員長だった私を本当に助け支えてくれた同級生のYさんを、それからの私の人生で何度思い出したことでしょう。いろいろな場でリーダーを支える立場になるたびに、私は当時19歳だったYさんの配慮ある動きを無意識のうちにいつも手本にしてきたように思います。

また寮の先輩、後輩との交流も懐かしく思い出されます。同室の先輩は退寮する時、私にペンダントをプ

レゼントしてくれました。「私の一番のお気に入りです。」と書かれたカードと共にペンダントの入っているその箱は、幾多の引越しを経ても手元を離れることはありません。そして今でも互いに年賀状で近況を報告しあっています。私たちが卒業する時になると、国文科の一年生が中心となって、『汽車』～二年生卒業に寄せて～というガリ刷りの文集を定期試験中にも拘らず作成してくれました。読み返してみると、一年生のほとんどが文章を書いていて、そのうちのなんと10人もが自作の詩を寄せていました。集団生活の中にあっても自分を見失うことなく自分の内面と向き合う時間もきちんと持っていたのだと驚きます。数人の二年生も思い出を書いていて、その中に寮周辺の四季を描写した文がありました。「春には紅いツツジが咲きみだれ　五月に黄色いバラ　六月は紫のあじさい　夏はうっそうと茂る柳　秋には何かな？　冬には富士山がよくみえるんだ」。それぞれの花や木がどこに咲いていたかも目に浮かべることができます。短大生の時にキリスト教信仰を持った私は、同室の後輩に、「これから人生でもし何かあったら、ぜひ教会に行ってね。」と言って別れました。彼女はその直後に短大に来られたR.スウィジー宣教師によって卒業後クリスチャンとなり、その後大学に編入し、アメリカに留学、現在は牧師として活躍しています。この世の中で私のことを今もなお「先輩」と呼んでくれる唯一の人で、そう呼ばれる時、なにかとっても嬉しい気持ちが込み上げてくるのです。

ところで、関東学院女子短期大学の女子寮を「ルツ寮」と名付けた方の思いは何だったのでしょうか。毎日目にする食堂の壁には聖書の一節が書かれた大きな額が飾ってありました。それは旧約聖書ルツ記の「わたしはあなたの行かれる所へ行き、またあなたの宿られる所に宿ります。あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神です。」（ルツ記1章16節）という言葉でした。夫を亡くした後、生まれ故郷モアブの地を離れ、夫の母親と共にイスラエルのベツレヘムに移住したルツ。その後イスラエル人と再婚し男の子を産みます。その子の孫ダビデはイスラエル第2代の王となり、その家系からキリストが誕生します。ルツは新約聖書マタイによる福音書の1章に書かれているイエス・キリストの系図に名を連ねる女性となりました。故郷を離れた後のルツの祝福の人生を、寮生にも「あれかし」と願ったのかもしれません。

私は現在、大学で事務職員として働いていますが、単に短大の卒業生というだけではなく、寮生活を経験し、そこで多くの方々の温かい思いを受けたからこそ、今、関東学院や学生たちへの熱い思いを持って仕事に向かえるのだと思います。当時の学院に関係する先生方や働いていた方々は、私たちを両親から預かった大切な存在として本当の家族のように大事にしてくださいました。そのことを思う時、関東学院の建学の精神は人を通して流され、伝えられていくものなのだと改めて感じるのです。

「関東学院女子短期大学学寮」、「ルツ寮」、「ルツ館」と名称が変わって使われてきたこの建物も、今年（2017年）、その53年の働きを終えて取り壊されるとのことです。目に見える物がなくなる時、それと共に記憶も薄らいでいきがちです。しかし、あの場所に脈々と流れていた「関東学院スピリット」が、これからも学院内で受け継がれていくことを願ってやみません。

1971年短大学寮クリスマス会

初代ルツ寮

左）ルツ寮室内　1975年

下）第3ルツ寮　1995年

ルツ寮の思い出

元ルツ寮栄養士（大学職員）　小野寺里佳

関東学院女子短期大学を卒業して５年目の春、在学中お世話になった山口和子先生から「学生寮（ルツ寮）の栄養士として働いてほしい」と声をかけていただき、五年間働いた病院を退職し、母校に再就職することになりました。入職前、当時、学長をされていた林淳三先生にお会いする機会を設けていただき、懐かしさと栄養士として新たな気持ちをもった事を覚えています。久しぶりに見るキャンパスは、学生時代建設中だったE4号館や新たに図書館棟が建ち、緑も豊かで清々しく感じました。

ルツ寮は、室の木公園側に第一ルツ寮、侍従川側に第二ルツ寮の２棟が建ち、約90名の寮生と二人の寮母さんが生活を共にしていました。寮生の一日は、起床、朝食、昼間は学業やクラブ活動など構内で過ごし、寮に戻ると課題と取組み、仲間との歓談、夕食、入浴、就寝というスケジュールでした。ルツ寮では、毎月の「寮会」、一年生を迎える「入寮歓迎会」、寮生同士の親睦を兼ねる「寮祭」、クリスマスを喜ぶ「クリスマス会」、二年生を送る「送別会」が行われ、学科、学年をこえて寮生同士の親睦が深まり、寮生活を通して社会性、協調性を学び、有意義な学生生活を送る場になっていたように思います。

寮食は、月曜日から土曜日の朝夕２回。食事の前には祈りを捧げ、食に携わるすべての人やものに感謝する気持ちをもつことを大切にしていました。寮生とは、「食事ノート」を通じて感想や意見を聞き、日々のメニューや食事作りに生かし、食習慣、生活習慣など、食の大切さを理解してもらうことを心がけました。季節ごとの行事食をメニューにとり入れ、寮の行事では、教職員を招いて寮生と食事を共にし、親睦を深めていました。特に、クリスマス会では料理長とメニューを考え、調理員さん達と盛付けや飾付けを工夫し、楽しみながら食事をしてもらえたのが、懐かしい思い出です。

関東学院大学「青雲寮」

「青雲寮」について

工学部工業化学科
S40年卒　香川詔士

関東学院大学には青雲寮、橄欖寮、YMCA寮、女子短大にルツ寮があった。中でも「青雲寮」は歴史も古く規模も大きく、最大時には300名（当時の大学生の1割弱）が居住しており、寮生が関東学院大学の校風の一端を担っていたといっても過言ではない。

青雲寮で行われた年間行事はその時代時代によって異なっていたようである。中でも長く続けられたのは新入生が入った5月の母の日に入寮記念として寮生全員の写真と名簿を作成したことである。大学祭に寮生として仮装行列を行った年もあり、伊勢佐木長者町や金沢文庫商店街（すずらん通り）、金沢八景駅前と、その年の実行委員会によって場所が決められた。

秋にはバス旅行やスポーツ大会を行った年もあったようだ。特に平潟湾一周駅伝大会や夜間強行軍を各部屋対抗で競った催しもあった。これら行事の中でも「絶対的」というか強制的に参加を求められたのは毎週水曜日の夜の会食（夕食会）であった。この会食には出席が義務付けられ、食前の祈りと説教があった。欠席する場合はあらかじめ舎監に届け出ることになっていたと記憶する。

寮生の一日は朝8時ごろまでに食堂で朝食（パン1枚と紅茶）を済ませ、授業に出て12時頃に帰寮して昼食（カレーや丼）、午後6時夕食、10時消灯というスケジュールであったと思う。一番の記憶は当時の食事が一汁一采で、麦が2割の麦飯がドンブリ一杯の支給であったので育ちざかりの寮生は夜中の空腹に悩まされたことだ。

今回、ニューズレターのテーマが「学寮」であったことから、OB会誌「さんよう通信」を通じて、元寮生に声をかけ、投稿を依頼した。多くの方から、それぞれが暮らした青雲寮の様子をお寄せいただいた。投稿された原稿を全て掲載したいと考えたが、紙面の都合で文章の一部分を割愛編集させていただくことになった。ご容赦願いたい。

火災の記憶

工学部建築学科
S28年卒　山崎光廣

昭和27年の青雲寮の火災について、記憶の許す範囲内で報告いたします。

1月上旬午前1時前後に、突然上の階で、洗面器が「カランコロン」と大きな音を立てて落ちる音がして目が覚め、飛び起きて窓の外を見ると、真上の部屋の窓から、煙と炎が吹き出していた。一大事と気付き床に毛布を拡げ、取りあえず明日バイトに着て行く為の衣服やコート等を投げ込み、担いで外に運んだ。

二度目の持ち出しに来た時には、停電となり内部は可成り暗かった。南側の職員寮を見ると、関原教授が飯盒に水を入れ外壁に向って必死に掛けているのが見えた。二度目の持ち出し品は、同室の佐々木宗吉君が帰省する時に「先輩、若し火事になったらこれを持ち出してください」と柳行李を頼まれた事を想い出し、咄嗟に担いで廊下に出た。その時には東西の階段を傳い下りて来た煙が、天井を這う様に伸びて来ていた。身を沈めて歩いたが煙は渦となり、自分も少し煙を吸ってしまった。三度目に這入ろうと来た時には、二階の焼け落ちる物音が激しく、身の危険を感じたので中止し、建物の東側の外部から、各建物の燃えるのを眺める丈であった。

後日、自分の部屋の在った跡に行き、焼け残った物が無いかと探してみたが、愛用のカメラの残骸が出て来た丈で、全て灰になっていた。焼けてしまって残念なのは「幼少期の写真や、小中学の卒業アルバムそれに十年あまり続けて書いていた日記帳」等である。当日寮生で残って居たのは5～6名であった。出火した部屋の住人も確かに居た。原因は漏電・・・とあるが、残念である。（青雲寮1階H号室）

青雲寮入寮当時の想いで

経済学部経済学科
S30年　薄 襄治

雪が残る会津から気候温暖な湘南地方を訪れ、季候の格差に驚愕の念を抱いたものである。入寮後、部屋割りも決定し1部屋4人収容の梯子付き2段ベッド、廊下の幅は約3m、部屋の前は洗面所、元大日本帝国海軍の老朽木造兵舎ながらトイレは水洗で、日本古来の脚力強化式に慣れ親しんだ私には珍しく、此処から4年間の学生生活が始まった。

部屋長は福島県の旧制磐城中学出身の鈴木哲夫（現南波佐間）先輩である。楽器が得意な方で四六時中ギターを指導して頂いたが生涯を通じての趣味になるとは夢にも考えていなかった。

入寮後旬日にして新入生歓迎会が開催された。高校時代合唱団に所属していた久保雅之氏は「木曽節」、保科豊氏は「千曲川旅情の歌」など、鍛えられた美声は、半世紀以上経過した現在でも脳裏に刻み込まれている。順番が回り私は当時大流行していた近江敏郎の「湯の町エレジー」を弾いたのが縁で思わぬ人的繋がりに発展した。その頃、青山学院大学の工学部は横須賀市にあったが、昭和24年関東学院大学工学部と合併になり、青雲寮には青山学院大学からの編入学生が数十名在籍して居た。その中にはハワイアンバンドを編成して横須賀市内でアルバイトをしており、バンマスから誘いの口がかかりメンバー一員として加わり、生活面では非常に助かったことは生涯忘れることはできない。

2年生の昭和27年の正月は会津の実家にいたが、7時のニュースで青雲寮が全焼したことを知り、急遽上横するに及んだ。この日の宿泊は何処へどのようにしたのか記憶はない。後日、横須賀のアメリカ海軍司令部からバプテスト系のミッションスクールである誼で一人あたり￥3,000の見舞金と布団が贈られ感謝の念で一杯であった。大学側と瀬ヶ崎町内会との打ち合わせで、木造旧兵舎の内装工事が完了するまでの期間限

定でお世話になることになった。食事は学内の食堂で大学から支給されたと思う。

青雲寮第二寮が開設されると同時に被災者の一部が移り、初代寮長はバトミントン部の中込篤、二代目が金成光雄、同期には徳久五郎、古友督、後輩では空手道部の加藤聖三、小林和夫などが当時の仲間であった。

現在85歳になり、年齢相応に故障を抱えていますが、東京五輪までは何とか頑張るつもりです。

青雲寮の想い出

土木工学科
S30年卒　高宮隆治

昭和20年代は地方出身の学生が東京神奈川で、食住を確保する事は難しい時代でした。青雲寮は地方出身者を入寮させて下さり、私も昭和26年4月入寮しました。舎監の中居先生に挨拶した時強度のメガネの奥に、慈悲に満ちた温かさを感じ安堵しました。寮は木造2階建てで北側の長い廊下に共同の流し台が有り洗面所として、使っていました。部屋は4人で押入れ式の2段ベットで私の部屋は1階で入室者は3年機械科村上さん福岡出身（後の教授）2年電気科早瀬さん1年経済佐々木君（宇和島）1年土木科高宮（長野）で、室長は村上さんでした。同じ建物には中居先生、富田先生もお住まいでした。食堂は礼拝堂と同じ建物に有り都竹さんが経営して居られました。寮生は全国から来ており旅行など出来ない時代でしたので、見た事のない各地の話を聞くのも楽しみでした。

隣の部屋に3年機械科の荒瀬さんが自作の真空管式ステレオで音楽を聞かせて下さいました。帯広出身で函館からの汽車の旅で狩勝峠から眺める十勝平野の広大さを聞かせて下さいました。

後年仕事で狩勝峠を通過した時、懐かしい青雲寮を想い出しました。宮崎出身に同期の桐木、志田、那須君から民話に出てくる椎葉地方の話等を聞きました。宇和島出身の佐々君は海に面した傾斜地が多くみかんと甘藷の乾燥芋を食べたと話してくれました。寒い所育ちの私は南の温かい地方の事を聞くのが楽しみでした。

冬休みで帰省中昭和27年正月ラジオニュースから青雲寮火災が放送されました。数日後大学から授業は平常通り開始する通知が来ました。寮の焼け跡を目の当たりにしたとき、部屋に残した物は全て灰になってしまいました。当時の住宅事情も良くない時代に近隣の方々が部屋を貸して下さり、都竹食堂で食事をさせてもらい無事講義を受けられるようになりました。私も都竹さんのお世話で八景駅前に住む事が出来ました。60余年以前の記憶を辿りましたので誤りが有りましたらお許し下さい。

S31（1956）年10月　青雲寮祭　三浦半島バス旅行（黒田正也提供）

青雲寮の記録

経済学部経済学科
S32年入寮　高田晃一

当時、入寮した棟の位置はグランド側。旧兵舎を改造した？一階に学生食堂、二階に5～6部屋（2段ベッド、木製の机が窓際に？）が並び、4人部屋でほぼ満室であったと思います。

部屋のドアは板戸で開閉式。寮則もあり舎監は教授の方であったと思います（お名前は覚えておりません）。

周囲の環境は閑静で長閑で、平潟湾を望み余暇を散策するには申し分のない環境でした。学習は「夜遅く」型が多かったと思います。昼は時折米軍のヘリが追浜方面の空を飛ぶ音が遠く聞かれました。

学院の近くに大衆浴場があり、総合病院もあり、日常の暮らしには大変便利な場所であったと思います。

共同生活の経験のない私には当初、先輩諸兄や出身地の異なる同輩との接し方、対人関係に戸惑う点もありましたがぎくしゃくすることなく自然に溶け込んでいったと記憶しています。入寮した11月の秋の大学祭には部屋の先輩方の発案？で有志を募り寮生の仮装行列が企画され、私も南方の土人（正しい表現ではない？）に扮して参加し、大学祭に一役買ってでたこと懐かしいかぎりであります。当時は金沢八景駅前折り返しのコースで練り歩き一味違った学生気分を味わい大学祭を盛りあげました。［グラウンド側（南寮2階？）］

青雲寮交友雑感

S32年入寮
井道令三（旧姓　中西）

人から関東学院大学の思い出はと聞かれると、私は青雲労の思い出と答える。そしてよき友を得た寮生活を懐かしく思い出すのである。

昭和32年4月入学式前々日、四国今治から布団袋とトランクを提げて、入寮した。寮に到着した際、最初に声をかけてくれたのは、四国高知出身3年次生の先輩であった。同じ四国出身と言われ懐かしく思った。自分の部屋は南寮1階で4年次生（部屋長）、2年次生、新入りの1年次生4人であった。計6人、ベッドは壁に固定で2段4組あり、4年次生、2年次生の先輩が上下1組を使用し、1年次生が1段目を勉強用兼寝台として使用した。でも、皆ベッドに小さな机を置き先輩たちは勉強用、寝室用と分けて使用し、1年次生は1段のみを使用した。私も勉強机として吊り上げ式の木板1枚代用机を自作で取り付けて、寝る時は吊り上げ、場所を広げて寝ていた。2年次生の先輩は朝起きが苦手らしく、朝食のパン持ち帰りを時々頼まれた。1枚半である。その際、紅茶1杯が自分で飲めた。2年次生の時、冬の部屋暖房は火鉢炭火であったが、たまに、外航船に乗っていた兄の横浜寄港土産のバターを使った即席味噌汁をつくった。ご飯は部屋の人数4人で、飯盒1杯で丁度良かった。ただ、

他の部屋の連中には申し訳ないが、その時は部屋の入り口の窓ガラスに目隠しさせてもらった。その時の後輩３人とは、私が卒業１年後の年末年始、会社の同僚を加え５人で新潟赤倉温泉に４泊スキー旅行に行ったのも懐かしく思う。ちなみに、同室だった後輩２人が機械科であり、４年次生の卒論研究室が私と同じであった。現在、１年後輩のグループは、私達同期の研究室仲間のグループに加わり毎年秋に伊豆方面で一泊している。会えば寮生活の昔話に花を咲かす。

青雲寮の生活では、やはり、機械科の同期生との交友が今の私の人生に最も影響を与えてくれたと思う。一般教養・専門科目を学ぶのに、ともに受講することも多く、よく話し合った。そして、４年次生の卒論研究室は青雲寮の仲間４人が服部研究室に入った。３人はグループメンバーとして取り組んだ。

卒業後、鉄鋼会社に勤務し、転勤も多かったが、昭和60年川崎市に定住してからは、青雲寮時代の同級生から誘われ、機械工学部OB会幹事としてお世話になった。現在も晴雨雨量で一緒だった機械OB仲間と交友している。これが私の楽しみで、一番の健康方法かもしれない。

青雲寮で学んだもの

工学部機械工学科
S37年卒　堀川武広

青雲寮には入学（S33）から卒業（S37）まで４年間お世話になりました。当時の青雲寮は校庭に面して、北寮、中寮、南寮の木造３棟であった。特に北寮の２階からは美しい平潟湾を眺めることができた。各部屋には２段押入れ式ベッドが設けられていて４～６人が入居し、全員で約250名が生活を共にした。毎朝「朝食の準備ができました」という寮内放送があると食堂に参集し、食パン、ジャム、紅茶の朝食を頂きその後、各々授業に出かける日々でした。

普段の日は夕食後各部屋とも自由に出入りし、田舎の話、友達の事、授業の事などで話し声が廊下まで聞こえるほどでした。しかし、試験時になると各部屋とも一変して静かになり、各自勉学に努めている様子がうかがい知ることができた。試験が終わると江ノ島、逗子、鎌倉へ散策に行く者、金沢文庫称明寺で歴史を楽しむ者、伊勢崎町に買物に行く者などで寮内は閑散となった。時には夕食後の散歩に平潟湾、夕照橋、野島公園、そして展望台まででかけた。そこからは東京湾に出入りする大型船を眺めることができた。夏の夕方は海風を受けて気持ちの落ちつく場所でもあった。春には新入生歓迎会、夏には寮対抗野球大会が盛大に行われた。特に母の日は食堂関係者、受付、管理人の方々に感謝の意をこめて寮生全員の記念写真を撮った。私の手元には「昭和36年度母の日記念撮影」と記した写真が大切に保存されている。

私は青雲寮で過ごした４年間でたくさんの寮生と生活を共にすることができた。その過程でとても大切な「人間工学」を学ぶことができた。大きな収穫であった。

昭和37年３月、機械工学科を卒業し東京羽田に本社がある企業に就職し、会社の寮で新しい社会人として出発した。それから46年間退職するまで設計部など常に技術畑を歩み、その過程で常に新しい技術の習得に努力した。一方では、その技術を次の若い技術者に継承することで技術の発展を期待した。

学院の校訓「人になれ　奉仕せよ」の精神を思い出している昨今です。

私から見た歴史・青雲寮

工学部機械科
S39年卒　井上民雄

私の入寮した昭和35年度は、神武景気・なべ底景気を経て岩戸景気に入り、消費ブームやレジャーブームが起きた時代であった。しかし一方では、日米安全保障条約調印の年で、入寮早々の６月には、全学連の国会乱入があり、樺美智子さんが死亡し、首都圏の大学の殆どが前期の授業が出来ない状況であった。幸いにも青雲寮は、田代舎監や顧問の中居教授、寮母の大井さん、学生課の鈴木さん等がしっかりと管理しており、寮内での学生運動は皆無であった。（学内では、一部の学生の活動はあったが）

寮生活は、キリスト教をベースに置き入寮早々、会食では、賛美歌、聖書朗読、祈祷等があった。特に、この時青雲寮寮歌もあり、グリークラブの先輩より楽譜で丁寧に指導された。室は中寮で、３年生の先輩を室長に新入生４人が入った。その内の２名は新設された工業化学科で、大学の力の入れ具合も特別だった。行事としては、春の「母の日」、秋の寮祭と演芸大会、バス旅行、棟別対抗ソフトボール大会、冬のクリスマス等があった。特に、演芸大会では、同室の新入生３人でジーパンを履いて「ネリカンブルース」を歌ったが、田舎出の自分にとっては初めての経験であった。２年目は、南寮に移り同じ２年生の電気科の副室長とで機械・土木・工業化学の新入生３名を受け入れた。池田首相の「国民所得倍増計画」演説のあった年で、将来に不安を感じ無いで勉強出来た。特に、この年は大学で初めてラグビーの同好会が発足し、同じ室から、森川君（２年）と玉置君（１年）が入部し、北寮に隣接した貝殻交じりのグランドで泥んこになって練習していた。そのラグビーが全国制覇するとは、想像も出来ないことであったが、青雲寮がその中核であった。３年目は、電気科の副室長（２年）と機械・建築の新入生２名であった。この年の思い出としては、「母の日の記念写真」で、北寮の全景が鮮明に撮れて居り、印象的な写真であった。

私の、お世話になった３年間は、「ありがたや節」（1960年）、「上を向いて歩こう」（1961年）、「いつでも夢を」（1962年）等の流行歌のはやった時代で、1964年の東京オリンピックに向かって将来に希望と夢を持てた最高の寮生活であった。

共同生活から得たもの

経済学部
S39年卒　谷田部　靖治

私は、1960（昭和35）年入学と同時に青雲寮に入寮し、３年次生までお世話になりました。

九州から出てきて何もわからない18歳の私にとって、舎監の田代ご夫妻と大井寮母さんは親代わりの存在であり、淋し

いどころか、何時も声を掛けて頂き元気に明るく過ごせたこと感謝しています。当時、寮生は250名の大所帯で北海道から沖縄までの出身者で占められ、当初は方言が飛び交い会話に馴染むのに戸惑い苦労したことを覚えていますが、お陰で沢山の友人ができ、この数年、燦葉会で全国の支部訪問の先々で仲間に会う機会を戴けたことも今思えば青雲寮時代のお陰です。また、クラブはグリークラブ、ゼミは山田一郎ゼミに参加したことも、寮生仲間のお陰で青雲寮OBとして50数年経った今も同窓会で会っています。特に、グリークラブでは、毎日4年間厳しい練習を通じて信頼感が増し一時は部員が130名を越えました。また、中居京先生とは全国演奏旅行に、坂田佑学院長は合宿場の御殿場青年の家を訪ねて頂いたこともあり、それが縁で1962（昭和37）年には、アメリカバプテスト連盟100周年記念親善使節としてカルテットで40日間の演奏旅行の機会を戴き、聖歌隊（コーラオリヴァ）として発足して以来85周年の今日までの歴史に残ることとして忘れられません。

昨今、集団生活を嫌う若者が多く、コミュニケーション力が貧弱と云われていますが、寮生活がもたらしてくれた学生生活には、支えてくれた大学の教職員の方々の親身になった導きと共同生活の環境施設（青雲寮）が整えられていたお陰だと感謝しています。これからも「人になれ　奉仕せよ」の校訓を胸に秘め、感謝の気持ちを忘れずにいたいと思います。（青雲寮　中寮39号室　部屋長）

青雲寮のころ（1960-1962）

経済学部
S35年入寮　槌谷　孝

私が関東学院大学経済学部へ入学を許可されたのは、1960（昭和35）年4月のこと、入学式より前に青雲寮に入寮できたように記憶している。

入寮先は南寮22号室で先輩（機械2年生2名）と新入生が土木1名と私の2名でした。その様子が、古いアルバムの夜のひと時の写真の語らう様子から、入寮時の一端、そして当時の寮生活の様子が知れる。

5月の黄金週間に鎌倉の大仏、近代美術館、江の島などを案内してくれた、この2人の先輩方は今どうされているだろう、懐かしく思い出される。そして、翌年の1961（昭和36）年5月には、寮祭が行われ、大学から国道16号を金沢文庫駅あたりまで「殉教者」のテーマを掲げて仮装行列を行っている。その秋には、1957年に完成して、当時東京都の水瓶と言われた小河内ダムへバス旅行を行ったりしている。

年が明けて、1962（昭和37）年1月には青雲寮生の「成人者を祝う集い」が催され、富田先生から祝辞をいただいたのち、成人者人一人一人に記念品が贈られ、ついで寮歌を歌い、式後には成人者そろって記念写真を撮っている。そこには当時の、また、ご自分の若き日の姿を、見つけられるかたもおられるのではないでしょうか。そして、お元気な田代金吾舎監のあり日の姿も見つけることができる。

青雲寮の思い出

S35年入寮　廣木元哉

私が関東学院大学へ入学したのは昭和35年、故郷北海道稚内から40時間以上も汽車に乗り横浜へ辿り着き、青雲寮へ入寮しました。当時寮は南寮、中寮、北寮と3棟に分かれていて私は南寮1階6号室でした。二段ベッドの4人部屋で上段が寝室、下が机のある勉強スペースです。250名程住んでいたと思います。食事は3食付で朝はパンとイチゴジャム、ピーナツバターと紅茶で、昼食、夕食は食堂の方々が一生懸命調理する美味しい食事でした。寮生活は通常一年生時のみですが私は4年間お世話になりました。その中で寮長も経験させてもらい光栄でした。当時関東学院大学、短大、神学部には4つの寮があり、青雲寮、YMCA寮、ルツ寮、かんらん寮です。みんなで寮生活を共有し青春時代を謳歌しようではないかと言う話が出て、実行委員会を立ち上げ、合同寮祭を行うことが出来ました。一番のイベントは、バス旅行で夜遅くまでキャンプファイヤーとフォークダンスで楽しみました。

4年生になり卒業近くのある日、当時の舎監であった田代金吾さんが同級生5、6名を卒業の思い出に三浦半島の温泉に一泊旅行に招待してくれました。

私は体育部連合会卓球部の主将で、関東学院で試合の時に青雲寮生が体育館に100名位応援に来てくれ、神奈川大学に大勝利したのを昨日の様に覚えています。

青雲寮の食堂には工学部建築科の星野喜野二先輩の奥様が食堂の栄養士をされ、毎日250名分の食事を作っておられました。夕食時に欠食者が10名くらいあり栄養士の星野さんから、その分を夜、卓球部の練習が終了した後に青雲寮で食べさせていただきました。

関東学院事業部の方から卓球台2台が卓球部に寄贈され、古くなった卓球台を青雲寮へ持ち込みました。そして寮生全員が卓球できるようになりました。

青雲寮から銭湯へ行く途中に阿部キンさんという方がヤキソバ屋をしていました。一皿当時20円で一週間に2～3回食べに行く寮生も居ました。その店には小さなテレビがあり、野球やプロレスの中継を見ました。

私は56年前をふりかえり青雲寮でのキリスト教教育の4年間の生活がかけがえのない人生経験であったと感謝しています。（S37合同寮祭相模湖バス旅行）

キリストとの出会い

工業化学科
S40年卒　平泉忠廣

「キリスト教の学校は進駐軍が経営しているからいい大学だ」と言われ郷里を後にした、戦勝国の米国文明に憧れ青雲の志で入寮したが、クリスマスも判らない自分にキリスト教は未知の世界であった。それは入寮時の食前の祈りから始まった。最後に「アーメン」と唱えさせられた。母の日などの記念撮影行事等をキリスト教とは無関係と思っていた。イースターの日、教会の子供たちと寮生で野島山での早天礼拝を行った時、山上からの海は実に素晴らしかった。その日、北寮の神学部生の三沢さんが訪ねてきた「今日貰った卵を一緒に食べよう」と言い放蕩息子の話をして帰った。神学部生は牧師の卵である事を知った。

大学祭での仮装行列は十字架のキリストに扮した者を担ぎ聖書を持って金沢文庫駅まで厳かに行進した。それを見ながら私は空手道部なので女装した先輩を担ぎ騒ぎまくった。中寮二階の四番目の部屋で他寮生から敬遠されていた。神学部で寮長の桜井さんが2階寮長室に入った事によりキリストに近づいた。試験問題の「パウロの改心」は酷であった。しかし、桜井さんに教わり何とか書けた。さらに宣教師エリオット先生を紹介される。英会話に触れるきっかけとなった事は、後に海外空手道指導で役に立った。同部の成島君に強引に教会に勧誘される。2年になって新寮生の船津君を誘い教会に行く。彼は今、大学近くの教会の牧師をしている。同高校の山田君に空手道部顧問でもある中居京先生と大島良雄先生を紹介され住居が学内なのでしばしば訪問した。部活動の厳しさから酒を飲んで騒いだ事があり佐久間学生課長の呼び出しを受け叱咤を覚悟して望んだが「武道をやることは素晴らしいことだ」と励まされた。

これらのクリスチャン先生の影響でキリスト教主義の学校の教員となった。田代舎監と鈴木さんの聖書輪読会に参加し始める。少人数ではあったが少しずつ聖書が理解出来た。「青雲寮の主」と言われながら寮委員として3年になった。化学科教授で空手道部員を毛嫌いしていた加藤先生との仲を取り持った香川君や同じ部の水島君など同期生は寮を去っていた。3年夏、六浦駅近くに下宿した。近くには森田君など多くの元寮生がいた。寮にいたことはイエス・キリストとの出会いの場であった。

写真（S38-39）

S38入寮　内川光弘

1.第一回青雲寮修養会（軽井沢山荘）

2.学祭青雲寮仮装行列
3.青雲寮葉山海水浴
4.南寮21室ガリ勉中
5.4号館側より（後は図書館）

青雲寮での生活

工学部工業化学科
S45年卒　日向春己

私は、昭和41年（1966年）4月に青雲寮の北寮に入寮しました。一階が事務室と大井寮母さんの部屋、厨房と食堂で、二階に田代舎監の部屋と寮室A～L室の12部屋でした。入寮時は大学の管理下で厳しい青雲寮則の生活でした。消灯厳守で午後10時に上級生の「消灯」という称呼で一斉に消灯でした。又、廊下の電気コンロ上のヤカンが沸騰したままだと、「ヤカンの湯を沸騰したままは、誰だ、気をつけろ！」田代舎監が大声で怒鳴って火には気を配っていました。

水曜祈り会食、新入生歓迎会、競歩大会、寮祭、箱根伊豆方面一泊バス旅行等、楽しい行事が行われていました。そして、1年次の冬には各部屋に炭一俵ずつ配られ大きい火鉢が唯一の暖房でした。入寮半年後に舎監不在の半自治寮状態になり、食堂での集会が多く翌年（昭和42年）から自治寮になったと思います。2年次にも寮に残るには、半年間の寮自治委員になれば楽と考え2年次の前期は自治委員で、夏休みが終わり9月に入って前期試験終了後、騒々しい寮を出て10月から下宿生活を始めました。その後、寮では新しく電気工事が始まり、電気コタツが備品として各部屋に大学から配られたそうです。自宅通学の学生や下宿生からは同じ学費を払っているのに寮生には全て要求通り

にしているとの不満の声が出ました。

そして、翌年（昭和43年5月）中寮と南寮が焼失、焼け出された寮生は体育館へ布団や焼け残った僅かな物を持ち一時避難状態で着る物も大学支給のグレイの作業着姿でした。 その後一部の寮生は葉山寮に移動したようです。不思議に思ったのは炭火鉢より、配線工事を行った後の電気コタツの方が安全率は高い筈なのに漏電で焼失したことでした。完全自治寮といえ、学生だけで寮管理が完璧にできるものではないと思いました。この後、大学は大きな紛争へ、そして1号館、7号館の封鎖等がありましたが、私が4年次の時は卒業研究もでき、後期試験も行われました。一方、学内は機能マヒ状態でしたから卒業式は横浜文化体育館でした。

僅か一年半の寮生でした。社会人になって寮での経験が役立つことが度々ありました。青雲寮は私の青春時代の大切な思い出です。

青雲寮の想いで

工学部土木工学科
S42入寮　阿部美智夫

昭和42年4月に北海道から夢と希望と不安を持って関東学院大学に入学しました。入寮は北寮で1階が食堂や調理場、寮母さんの部屋と事務室、洗濯場とシャワー室（水しか出ず、殆ど使われていなかった）に使われており2階だけが寮生の部屋でした。中・南寮に比べて部屋数は半分以下で他の寮に比べて北寮は仲間意識が強く、特に夜は一部屋に数部屋の寮生が集まって過ごすことがありました。北寮は部屋の番号がA～Iで、中寮・南寮は1号～というのが特徴的でした。私が入寮した42年から自治寮といわれますが、入学願書と入寮申込、決定通知等も全て大学の手続きと同時に行われので自治寮という認識は有りません。

青雲寮火災後の寮再建問題から大学紛争に発展したと言われますが、火災も一要因かも知れませんが、60年代後半から70年代にかけて各大学が紛争状態に有り、同様の理由で学院紛争が起きたのでしょう。入寮直後の新入生は部屋っ子（へやっこ）、先輩の1人が部屋長と呼ばれて、何となく古風と言うのか？建物の造りから、タコ部屋っぽい印象が有りました。

普通の部屋は4人部屋で（北寮はAだけが3人部屋）部屋長が2年生、新入生が2人、3～4年生が1名という構成がほとんどだったと思います。朝食は食パンとミルク紅茶でしたが、入寮したての頃、先輩に言われたことは「旨いからと言ってミルク紅茶を飲み過ぎるなよ！」でした。理由は直ぐに分りました。昼は学食で食べたり、金欠病になったら朝食べないで部屋に持って帰った食パンを食べました。入寮直後には、新入生が各寮毎に校歌の練習をさせられ、北寮が一番先にOKが出て練習を免除されたのを覚えています。月に一度、決まった日に寮生全員で夕飯の時に各寮の代表者が聖書を読み讃美歌を歌ってお祈りをささげ、その日は御馳走が出たのが嬉しい思い出です。住み込みの寮母さんと女性の事務員の方が居て、本当に親切にしていただきました。お金が無くなると日曜日に寮生で誘い合って学内のチャペルに礼拝に行く事が結構有りました。なけなしのお金を少々献金して、クッキーを食べたのですが、本当に美味しかったです。

寮の行事ですが、強歩と言うのが有り、全寮生と体育会系のクラブの学生も走っていました。葉山の御用邸の前を夜中の0時の時報でスタートして、一路江ノ島に向い、朝比奈峠を越えて青雲寮まで帰るコースでした。北寮の先輩達が10位以内に入ったら好きな物を食べさせてやると言う言葉につられ、一生懸命走りました。途中寮の役員からパンと飲み物や袋菓子を貰い食べながら、江の島に向って走りました。念願の10位以内となり後日たらふく飲ませて貰いました。実際は朝比奈峠付近ではバテバテでしたが、途中で数匹の野犬と出くわし、恐ろしさの余り、持っていたパンを放り投げて走ったのが功を奏したのです。

先輩が良く連れて行ってくれた、六浦の飲み屋の「音羽」、焼きそばの「ばば焼き」追浜駅沿いに軒を連ねていた焼き鳥屋、「お晩です」と先輩に挨拶をすると、帰ってくる言葉が「お前、北海道の出身！？」

1年間で寮生活は終わりましたが、寮生活で沢山の先輩、同僚と過した時間は4年間の大学生活の中で忘れられない最高の一時でした。（北寮B号室）

学寮とは？

工学部設備工学科
S56年卒　人見正宏

私は関東学院高校（三春台）を卒業後、青雲寮にはいりました。なぜ、地元出身者が入寮の措置を取ったかというと、高校在学中に父の転勤があり、転校をせずに親戚に身を寄せていたからです。なぜ転校しなかったかというと、エスカレーターの道を外すと、大学にいけない学力でした。同じ関東学院でありながら、三春台と六浦は交流もなく、まして担任の先生が青雲寮の存在を知っていても、実態を知るよしもなく、私は楽園と信じて入寮しました。

建物は旧海軍の兵舎を転用した木造二階建ての三棟で、グランドに面した北寮2階でした。部屋は4名定員で、二段式の上段が寝室で下段が机のスペースでした。1、2年生用でしたが、私の部屋には3年生と4年生が残っていました。最初に異変を感じたのは、学生服での集合でした。三春台の制服は、当時から背広にネクタイで、着たことも持ったこともありません。これは集団生活のお陰でことなきをえました。徐々に異変はエスカレートをしていきました。夜中に抜き打ちで廊下への集合、高校時代に五味川純平の「人間の条件」のテレビドラマや聖書より分厚い本を熟読していたので、ビックリはしませんでした。むしろ下から上がってきた「ボンボン」というのがバレないように、異常行動に陶酔している一部の2年生と、視線を合わせないように逆らわないようにしました。隣室の同期生は、体が丈夫で口も達者だったのであえて標的になることもありました。例として、深夜に両手に満水のバケツを持たされたり、ミンミンゼミをやらされたりと、軍隊そのものでした。その間、数人が退寮のみならず、退学をしたと聞きました。ミッションスクールとはほど遠い下劣な行為は続きましたが、幸いに入寮半年後家族が転勤から戻る事になり、私の兵役は除隊となりました。

皆様は、青雲寮の生活で、関東学院大学で「神様からのメッセージ」を頂きましたか。大方は聞こえないままに終わったことと思われます。もう一回大学のチャペルの礼拝に、出席されてみませんか。

学院史資料展 2016
「建学の精神と校訓『人になれ 奉仕せよ』の教育」

六浦こども園からの報告
六浦こども園の大学生ボランティア

六浦こども園の保育は多くの学生ボランティアに支えられています。

特に教育学部の学生たちによる、アトリエと読み聞かせボランティアは定期的に行われています。アトリエでは毎週２回、事前の打ち合わせをした学生たちが様々な材料や素材を準備してアトリエを開きます。楽しみにやってきた子どもたちが、面白がってやり始めた活動を学生たちは丁寧に見取り、支えます。様々な表現をする子どもたちに、ある時は格闘しながらも、一人ひとりの表しを引き出し、子どもの世界の表現を共に味わう中で、子どもへの理解を深めています。

また、絵本の読み聞かせの学生ボランティアも選んで準備をしてきた、とっておきの一冊を丁寧に読み聞かせする中で、子どもたちと心をつなげ、また一緒にお話しを味わいながら、子どものファンタジーの世界とことばの世界を学んでいます。

子どもたちにとっても大好きなお姉さんお兄さんとのかかわりを通して人間関係の幅を広げる機会となっており、相互にとってよいつながりと学びの機会になっています。

関東学院六浦こども園園長
根津美英子

のびのびのば園からの報告

「私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」

ヨハネによる福音書　15章

こども園としての歩み始めて5年目を迎えました。0歳児から6歳までの子ども達が共に遊び、生活し、お互いを思いやる心を育くみながら園生活を送っています。

昨年度11月23日には40周年のバザーを開催しました。年長の子ども達が中心となり手作り味噌や手作りのクリスマスグッズを販売しました。バザーの売上金は地域の施設や災害支援のために献金を捧げ、子ども達と一緒に、自分にできる事は何かを共に考える機会となりました。

6月の花の日礼拝、11月の感謝節礼拝では、各家庭から持ち寄ったお花や果物を地域の方々にお届けしています。近隣の小学校、保育園、地域ケアプラザ、警察署、消防署、特別養護老人ホーム、身近な警備員や用務員の方々等、各クラスの園児たちが感謝の気持ちを込めて「ありがとう」と手渡す事で、お互いに笑顔がこぼれる時間となります。

年長児は特別養護老人ホームに毎月誕生日カードをお届けしています。初めは緊張していた子ども達も、回を重ねるごとに楽しみに待っているおじいちゃん、おばあちゃん達を受け止められるように変わってきます。時には涙を流して喜んでくださる姿を見て心動かされる子ども達です。

0歳から6歳までの乳幼児期は人生の基礎を培う大切な時です。子ども達一人ひとりが愛され、受け入れられる経験を通して、相手の事を考えられる人になれる様にと願っています。

のびのびのば園副園長　平　幸子

小学校からの報告

保護者の清掃奉仕、コヘレトSG

関東学院小学校には「おやじの会コヘレト」という父親の会があります。父親も学校との関わりを持てるような活動をしていこう、という数名の父親のよびかけで発足したこの会の活動も、今年で11年目をむかえました。8年前からは年に数回、「コヘレトSG」という名のもと、三春台キャンパス内や通学路、学校近隣の清掃奉仕活動をおこなっています。「SG」は小学校で草創期から児童が取り組んでいる「奉仕を進んで行う活動」のことです。

コヘレトSGの活動は土曜の午前中に行われます。集合時間にあわせて父親はもちろんのこと、子どもたちもいっしょに小学校グランドへと集まってきます。コヘレト部長から清掃の際の注意事項を聞いたあとにはグループに分かれてほうきやちり取り、トングなどを手にしてそれぞれの担当の場所へ出かけていきます。清掃をしながら父親同士、おたがいの子どものようすを話しあったりコヘレトの活動について語り合ったり、となごやかな時間となっています。また子どもたちにとっては家庭でいつも見ている姿とはちがう、清掃奉仕をする父親の姿を目にするときともなっています。およそ1時間あまりの清掃奉仕活動ですが、ひたいに汗をにじませながらやりきった感ただようすっきりとした表情で、集めたごみを手に、子どもも父親も小学校グランドへとまたもどってきます。

「コヘレト」とは「集う」という意味の旧約聖書の中のことばです。平日はそれぞれの肩書をもって仕事をしている父親がコヘレトSGの日には「おとうさん」というシンプルな肩書で小学校に集い、清掃奉仕活動に汗を流す。子どもたちのSG活動が保護者のコヘレトSGの活動へとひろがりました。

関東学院小学校教頭　辻　望

六浦小学校からの報告

第15回 タイ訪問団の活動報告

1994年のことです。タイ北部の山中に住むカレン族の子どもたちが学校に通えなくて困っていることを知りました。そこで本校の教員が現地に行き、助けが必要であることを肌で感じ、支援が始まりました。この年には女子寮を寄贈することができました。それから途切れることなく訪問し、寮の存続のために支援を続けています。2003年には児童の参加が可能なタイ訪問団が立ち上がりました。

今年の夏にも、第15回タイ訪問団として1年生、4年生、6年生の3組の親子と卒業生4名が、カレン族の住むティワタ村を訪問しました。

ティワタ寮には、幼稚園児から高校生までの137名が生活しています。中には両親を亡くし、寮費を支払えなくなってしまった子もいます。その子たちが学び続けられるようにしたいというのも私たちの支援の内容の一つです。

私たちは人と人とのつながりの中で生きています。タイ訪問団は、毎年このティワタ村でとてもあたたかな、心の通ったかかわりを経験します。必要最低限の生活の中から私たちは豊かさの本質は何かを感じ、人とのつながりのあたたかさを感じます。このつながりを大切にしつつ私たちにできることをしたいと思わされるのです。その生活を知り、その人との豊かなかかわりが、私たちの行動を人のためへと向かわせるのです。平和な世界をつくり出すための一歩がここにあるように思うのです。

タイ訪問団の参加者、6年生の南山一哉くんの日記を紹介します。

「ぼくは、去年に引き続き、今年で2回目の参加でした。去年仲良くなったツースリー君がりょうをはなれて、家族の元へ帰ったということを、りょうに行った日に知りました。その時は悲しかったけど、去年ツースリー君が言っていた言葉を思い出しました。それは、『家に帰ったら親に感謝し、一生いっしょにいたい。』と言ったことです。それを思い出して、うれしい気持ちになりました。」

様々な思いをもって親元を離れて学んでいる子どもたちがそこにはいます。小さなことでも私たちができることをこれからもし続けていきたいと思わされます。

関東学院六浦小学校教諭　藤田友也

中学校高等学校からの報告

O.C.C. ハンドベルクワイア 第3回福島演奏旅行

今年は、2013年以来、3年ぶりの福島演奏旅行を沢山の方々のお祈りとご支援で無事に終えることが出来ました。心から感謝いたします。

震災復興を願って2012年に始まったこの演奏旅行は本当に小さな活動ではありますが、現地の方々に喜んでいただき、部員一同と共に毎回大きな喜びをいただいています。震災から5年の時が経ち、会津や裏磐梯には少しずつ観光客がもどって来ている様に感じます。津波被害に遭った沿岸部の方々とは少し違う印象を受けますが、会津若松市には大熊町から避難されている方々の仮設住宅がまだ247戸あります。猪苗代町も活気があるとは言えない状況でした。そんな中、地元の方々と身近にふれあい交流が持てたことは出会った人の数は少なくとも意味があったのではないかと思います。たった二人で活動する若松一高のハンドベル部の生徒とも交流することが出来ました。

全行程の中で3回のコンサートと1回の体験イベント、礼拝奏楽奉仕をしましたが、それに備える練習と心の準備も、部員たち特に上級生の意識の高さで十分なクオリティを保つことが出来ました。演奏そのものは、経験不足の下級生（入部して3ヶ月足らずの部員が5人）をかかえながらの演奏でしたから十分とは言えなかったかも知れません。しかし、演奏者全員が心を1つにしないと音楽が繋がらないハンドベルという楽器が奏でる音楽は、聴いてくださる方々の心に深く響いてくれたようです。ツアー中の演奏会にリピーターとして駆けつけてくれた方もいたことが、その表れであると感じます。

旅行の様子はネット上のブログ
http://blog.kantogakuin.ed.jp/occ/ でご確認いただけます。最後に部長の感想をご紹介します。

中高 O.C.C. ハンドベルクワイア顧問　鷹巣誠一

高校2年生　部長：飯野海音

中1の時に演奏旅行へ参加したときは必死に先輩についていくだけでしたが、今回は最高学年として部活全体を引っ張っていくという責任が大きく、4年前とは全然違う心持ちで福島へ向かいました。演奏旅行に行く前の練習では人数が揃わない日が多かったりして、正直お客さんの前で披露できるような完成度には達していませんでした。高2だけでなく部員みんなもきっと同じようにそのことをわかっていたと思うし、みんな演奏旅行へ不安があったと思います。私は特に部長としてまとめるべきなのに直前までそのような状態にしてしまったことを申し訳なく思いました。

不安と焦りの中、福島に行き、どうなるかと思いましたが先生に助けていただいたり、同学年と協力し合ったり、後輩も頑張ってくれたので、満足いかなかったところもあったものの聴いてくださった方々の暖かい言葉と感謝の言葉に確かな手ごたえを感じました。

今回の演奏旅行でハンドベルの素晴らしさ、自分がハンドベルを大好きなことを再認識できました。そして部活仲間と心の距離が近づき、1つのチームとして少しずつまとまってきたのではないかと思います。本番までの練習過程の課題や自分自身の課題も見つけられたので次に生かしたいです。また、先生をはじめ、本番の場所などを手配してくださった方、送り迎えをしてくださった宿の方、先輩方、家族、後輩、同学年などたくさんの周りの方々に支えられていることを実感し、この感謝の気持ちを忘れずに今年度このチームで全力で頑張りたいと思います！！

六浦中学校・高等学校からの報告

「人になれ 奉仕せよ」の教育

2011年3月下旬に、東北自動車道の通行再開を待って、本校の教職員に献品を募って、支援物資満載のトラックで塩釜在住の恩師のところへ向かいました。瓦礫を道路の両脇に寄せて、車1台がやっと通れる様な状況まで整備は進んでいましたが、ふと横に目をやると住宅に車が突き刺さっているような状況があちこちに見られました。

その惨状の凄まじさに、生まれて初めて“言葉を失う”という思いをして、自然災害の恐ろしさ、自分（人間）の無力さ、命の儚さ、家族の大切さ、人の温かさ、時間の大切さなど様々な思いが頭の中をよぎり、一人の人間として、教育者として出来得ることを模索していました。

岩手県の遠野市にサッカー関係の知人がいたことから、遠野は沿岸部の後方支援部隊のベースキャンプ地であり、サッカーが盛んな地域でもあったので、サッカー部の遠征とボランティア活動を同時に実現させたいと考えました。高校生が安全に実施出来て、被災地の方々のお役に立てる活動には、どの様な活動が適当であるのか検討を重ねて、2011年8月に遠野遠征が実現しました。現地では、田畑に残った瓦礫の仕分け作業や、仮設住宅にお住まいの方々が利用する集会所の建設予定地の除草作業などを中心に作業をさせて頂きました。生徒たちは、それぞれが様々な思いの中で一生懸命作業をしていました。その一途な姿を見ていて、胸が締め付けられる思いで、流れる涙を汗といっしょに拭いながら、「本当に連れてきて良かった」と深い感動を覚えました。

サッカー部の活動を知った一般の高校生から、「私たちも現地へ行きたい」と声が上がり、2011年の12月より高校生対象の東北復興支援ボランティアがスタートしました。年3回の長期休暇には毎回実施をして、今年の3月には14回目を迎えました。何度も参加をしている生徒たちは、以前作業をした地域が少しずつ復興へ向けて動き出している様子を見て、その一端を担ったことに、感慨深い思いをしている様子でした。また、初めて参加をする生徒は、現地の方々と接してお話を伺うことによって、復旧は進んではいるものの、本当の意味での復興への道のりはまだまだ長いことを痛感していました。

昨年の9月には茨城県常総市で、大雨によって鬼怒川が決壊して大きな被害がでましたが、その時にも「自分たちに何か出来ることはないか？」と生徒からの申し出があって、総勢70名のボランティアバスを出すことになりました。

このように、変事の際に自分に何が出来るのかを考えて、自ら行動を起こす大切さを日々の学校生活の中で学ぶことが、謙虚に人に仕え、利他の精神で動く志の高い人間へと成長させてくれ、校訓「人になれ　奉仕せよ」を具現化する礎になっているのでしょう。

関東学院六浦中学校・高等学校　中田 努

大学からの報告

東日本大震災復興支援ボランティアプロジェクト

2011年以来、関東学院大学も様々な形で被災地救援・復興支援活動を続けています。ラグビー部から始まり、硬式野球部、陸上競技部も加わった特別強化部による宮城県気仙沼でのボランティア活動。この活動は、規矩大義学長も出席する「タグラグビー大会」や、気仙沼の小学生や中学生とのスポーツ交流を中心とした活動として活発に行われています。図書館司書課程の有志学生による岩手県での学校図書館支援活動も継続して行われています。復興庁が支援する被災地企業での「復興支援インターン」、全国の大学のネットワークによる宮城県内各地での夏季集中ボランティアも毎年、本学学生が参加しています（今年度、インターン活動は不参加）。その他、ゼミ単位、クラブ･サークル単位での活動も多く取り組まれています。

そのような中、大学直轄のプロジェクトチームによるボランティア活動が2011年夏以来継続して行われています。

今年度も、8月8日（月）から12日（金）にかけて職員6名、学生16名のチームが現地に赴きました。宮城県南三陸町志津川。私たちは、この志津川にある仮設団地での奉仕活動を続けてきました。いまだに応急仮設住宅と呼ばれる狭い住居での不自由な生活を強いられているみなさんに、少しでも快適な思いを感じてもらえたら。そのような思いで草刈や、網戸の掃除等のお手伝いをしてきました。また、今年は有志学生によるギター演奏を含んだ食事交流会も行い、大変喜んでもらえました。尚、規矩大義学長が青森方面の出張途中、わざわざ南三陸町を回られボランティアメンバーへの激励を行っていただきました。

2011年夏、初めて現地を訪れた時は町のあちらこちらに漂流物がちらばり、屋上に自動車を載せたビルを目の当たりにした参加者一同は一様に息を呑みつつ、瓦礫の片付けに精を出しました。それから5年。南三

陸町は大規模な土木工事が進められ、かつての町は高さ10メートルの盛土がされ、商業地、加工工場地、そして震災祈念公園として生まれ変わろうとしています。かつてそこに住んでいた人々は海岸から離れた高台に移住を余儀なくされています。整然と区画がなされた

住宅地。真新しい災害公営住宅という名の集合住宅。大津波に襲われる前とはまったく違った生活がまさに始まろうとしています。仮設団地の皆さんも、新たな生活に期待が膨らむ一方で新しいコミュニティーを一から作らなければならないという不安も大きいようです。

高台に新たに造成された住宅地への移転は、2016年の冬から少しずつ始まるということです。早ければ、2017年の夏には引越しも完了し仮設団地も姿を消すかもしれません。これまで私たちはこの地で多くの学びを得ることができました。仮設団地という形がなくなっても、この地で築いた絆は決して無くなりません。現地の皆さんの新たな一歩にも、私たちは引き続き寄り添っていきたいと考えています。

関東学院大学学生支援室　鈴木康夫

◆事務資料

学寮名	青雲寮	青雲寮 葉山学寮	YMCA寮	カルゴル寮
住所	横浜市金沢区 大道町4334	三浦郡葉山町 堀内1387	横浜市中区山手 本町2-45	横浜市金沢区 大道町148
電話	0468 721-0441	0468 75-0133	0468 65-6733	0468 721-2001 内線479
構造	本道2階建	本道2階建	別館 独立平屋建 母屋 本道2階建	本道1階建
収容人員	60名	50名	別館 40名 母屋 20名	15名
一室当りの収容人員	3~4名	3~4名	別館 2名 母屋 2~3名	2名
入寮費	3,000円	3,000円	別館 10,000円 母屋 8,000円	なし
寮費	600円	600円	別館 [illegible] 母屋 [illegible]	なし
経営費（人件費）	付帯費(食費) 4,000円	付帯費(食費) 4,000円		なし
食費	朝食 210円 夕食費 300円	朝食 210円 夕食費 300円		自炊 外食
会議室	なし	なし	なし	なし
図書室	なし	なし	なし	なし
娯楽室	なし	なし	自動ピアノ1台	なし
浴場	なし	あり	あり	なし
学校までの所要時間	学内	40分	10分	3分

◆典拠（参考資料一覧）※ P14 ～ 17 にて参照

学寮＼出典	(1)関東学院百年史	(2)関東学院125年史	(3－8)その他
ダンカン寮（東京学院）	p.138, 234	p.15	(3)恩寵の生涯
檀樹寮（三春台）	p.612-613, 669-670		(4)この丘に立って（中高80年史）／p.40
青山寮（セイザンリョウ）（庚台（カノエダイ））			(4)この丘に立って（中高80年史）／p.41 (5)いんまぬえる No.11, p.10
三崎宿舎	p.360, 397	p.29	(4)この丘に立って（中高80年史）／p.48
中桐寮	p.529-530, 679-680		
かんらん寮	p.670-673	p.103-104	
YMCA寮（旧寮・新館）	p.670-673	p.103-104	
女子学生寮（後のルツ寮）	p.750	p.131-132	(6)短大30年記念誌／p.128-131 (7)関東学院女子教育50年／p.34
青雲寮（学寮）	p.464, 585, 612-613, 669-670	p.87, 98, 103	
軽井沢山荘	p.529-530, 679-680		
葉山学寮	p.673-675	p.103-104	
葉山セミナーハウス	p.524-529, 673-675	p.103-104	(8)関東学院大学30年の歩み／p.201-204

◆ニューズレターNo.19収録記事に関する訂正

No.19　2016.3　p27　根津美英子「ステンドグラスのあるいのりのホール」第3行

誤）どうしてもステンドグラスをどうしても　→　正）どうしてもステンドグラスを

◆ニューズレターNo.19収録記事に関する質問と調査報告

神学部に設置されていたパイプオルガンの記述について、設置の時期や資金関係が告知板No.2、No.4に記載されている内容と異なるのではないかという質問を頂戴しました。

神学部に導入されたパイプオルガンの記事には「三千ドルの寄付」との記載があります。編集部で事前に告知板の記事（「千ドル」と記載）を提示して、著者に確認したところ、「ヒンチマン先生から聞いた話で三千ドルと記憶している」と回答があり、原稿のまま掲載しました。アメリカの教会で葬儀屋を営む信者の方から頂戴した献金をもとにオルガン購入のための募金が行われた可能性もありますが、手元の資料では明確にできませんでした。購入金額については『KantoTimes』vol.45に約3千ドルという金額が掲載されておりますが、寄付金で全て賄われたかは不明です。

編集後記

学院における寮の歴史は古く、前身である東京中学院設立の1895年に寄宿舎が設けられ、共同生活のもとで教育が行われた記録があります。本号では、関東学院のキリスト教教育の礎となった「学寮」を取り上げ、その歴史と学寮で過ごした方々の経験談を掲載しました。また、共同生活というテーマのもとで、各校で行われている宿泊行事とキリスト教教育について、その取組を報告いたします。

経験談を投稿して頂いたのは学生寮である橄欖寮、女子学生寮（ルツ寮）、YMCA寮、青雲寮で生活した元寮生の方々です。原稿内容からは当時の寮生活の様子、年代が分かり、歴史記録を埋めることができました。寮生活の経験はその後の人生において有益であったとの報告も沢山あります。

出身者の多い青雲寮の方々には名誉教授で寮出身の香川詔士先生から投稿を依頼していただきました。先生のご支援がなくては、歴史の長い青雲寮の記録はまとめられませんでした。元寮生の方に原稿や貴重な当時の写真・資料を提供いただきました。お寄せいただいた資料は電子化して返却し、資料室にデータを保存いたします。各寮OB会ともデータの共有を図りたいと考えております。

事務資料の中から当時の寮に関するメモ（左上）が見つかりました。「青雲寮葉山学寮」とあるので1960年代後半から1970年代初期の資料と思われますが、寮費、食費など、当時の物価も伺い知ることができます。学院紛争の時期は寮の記録・資料があまりありません。当時の写真・資料などをお持ちでしたら、学院史資料室にご一報いただけますようお願いいたします。最後になりますが、御投稿および資料提供を頂きました皆様に心から感謝いたします。

（学院史資料室　外崎みゆき）

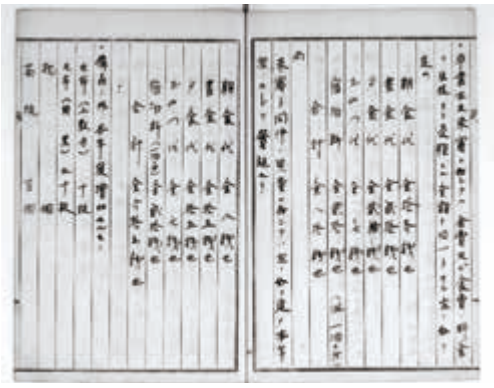
学院史資料・情報提供のお願い

卒業生、修了生、元教職員の皆様には学院に関する資料・情報の提供をお願いしております。また、職員の皆様には各学校、各部署で発行されました刊行物を一部、学院史資料室にご寄贈くださいますようお願いします。

関東学院三崎寄宿舎

関東学院坂田記念館は三崎寄宿舎に関する貴重な資料を所蔵している。「重要事項記録」では当時の宿泊費用が、「日誌」には当日の研修内容が坂田祐により記されている。（写真左は1939年教役者研修会）

寄宿舎表札



KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニューズ・レター　第20号　発行日 2017(平成29)年3月1日

発行人　関東学院 学院長 小河　陽

編　集　『関東学院学院史資料室ニューズ・レター』編集委員会

〒236-8501　横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL. 045-786-7066　FAX. 045-786-2932

再生紙を使用しています

2017.3.1.1100